古事記のものがたり

kojiki no monogatari

稗田阿礼が語る
ゆかいな
「日本の神話」

小林晴明
宮崎みどり

mythology

サン・グリーン出版

古事記のものがたり

稗田の阿礼が語る
ゆかいな「日本の神話」

小林晴明
宮﨑みどり

サン・グリーン出版

淡島

イザナギとイザナミの国生みの一番最初に水蛭子がうまれました。二番目にぼくがうまれました。

そしてすぐに捨てられました。

ひどい話です。神さまに言いつけてやります。

失敗したのは女の方から声をかけたのがだめだったみたい。

それが宇宙のおきてなんだって

古事記（こじき）のものがたり——もくじ

第一話　創世の神々と高天原……九
第二話　よいしょ、こらしょ……十三
第三話　いざなぎ・いざなみ……二一
第四話　涙から生まれた神さま……二九
第五話　黄泉の国（死者の国）……三九
第六話　黄泉つ軍との戦い……四七
第七話　両目と鼻から生まれた尊い神……五七
第八話　暴れ者の須佐之男……六五
第九話　天の安河（天の川）でのうけひ……七三
第十話　天の岩戸開き……八三
第十一話　尻に大豆、ほと（女陰）に麦……九一
第十二話　八俣の大蛇（おろち）退治……九九
第十三話　八雲立つ出雲……一〇七
第十四話　いなばの白兎……一一五
第十五話　赤い猪……一二一
第十六話　木の国から根の国へ……一二九

第十七話　蛇、蜂、ムカデの室……一三七
第十八話　死者の国からの脱出……一四五
第十九話　すせり姫の嫉妬……一五三
第二十話　光る船に乗ってきた小さな神……一六一
第二十一話　高天原からの使者……一六九
第二十二話　キジの鳴女……一七七
第二十三話　空とぶ船……一八五
第二十四話　国ゆずり……一九三
第二十五話　天孫降臨……二〇一
第二十六話　猿田彦とあめのうず女……二〇九
第二十七話　木花之佐久夜姫と石長姫……二一七
第二十八話　火中出産……二二五
第二十九話　海幸彦と山幸彦……二三三
第三十話　龍宮城……二四一
第三十一話　塩みつ玉・塩ふる玉……二四七
第三十二話　豊玉姫とわに鮫……二五七
あとがき

古事記のものがたり

稗田の阿礼が語る ゆかいな「日本の神話」

著者
小林 晴明
宮崎みどり

イラスト
小林あきら
荒木 尚美

ん？

わたくしですか？

わたしは稗田の阿礼と申すものでございます。

一三〇〇年ほどまえに朝廷に召し出されて、わたしが聞き覚えておりました神話を、太安万侶に語ったことがありました。安万侶は、わたしの話を『古事記』という書物に編み、後の世に伝えると申しておりました。

『古事記』には、この宇宙の始まりや日本の国の始まり、神々の歴史や日本人の自然観、風習など、わたしたちの祖先が語り伝えてきた大切な物語りが書かれております。ところが、その『古事記』が今の日本の人々にまったく伝わっていないうえに、忘れ去られようとしております。

ああ、わたしは悲しい。
それを、いま一度語りついでもらいたくこの世に現れてきたのでございます。
わたくし阿礼が、全身全霊をもってこの「日本の神話」を語らせていただきたいと思います。
まずは創世の神々のお話です。ではでは。

第一話
創世の神々と高天原

ふることに伝う。

この世界のはじまりは、天も無く、地も無く、時間も空間もない。有るのか無いのかもわからない。混ざりあっているようで、混ざってもいない。ただただだうす暗く、もやもやとした状態が果てしなくどこまでも広がっているのでした。呼び名もまだありません。

そのとき、天の中心から、

「た・か・あ・ま・は・ら（高天原）」

と呼ぶ声が聞こえたように思われました。すると、天と地が分かれだし、たくさんの小さな光の粒がこの世界に現れたのです。

あめのみなかぬし（天之御中主）の神でした。

宇宙の心そのものであるこの神様は、あらゆるところに満ちあふれておられたために、誰もその姿、形をとらえることができません。

そのつぎに、天からくるくる回転しながら、

たかみむすひ（高皇産巣日）の神が現れました。

つぎに、地から同じように回りながら現れたのは、

かむみむすひ（神皇産巣日）の神でした。

この二柱の神々もやはり姿、形が見えないのでした。

宇宙の始まりでございます。

このあと、たくさんの神様たちがお生まれになりますが、そのお話はまたこの次に。

天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）

ふることに伝(づ)う この世界(せかい)の始(はじ)まりは 天(てん)もなく 地(ち)もなく 時間(じかん)も
空間(くうかん)もない。あるのかないのかもわからない。まざりあっている
ようで まざってもいない ただただ うすぐらく もやもやと
したじょうたいが はてしなく どこまでも ひろがっているの
でした 呼び名(な)もまだありません
そのとき 天(てん)の中心(ちゅうしん)から
たかあまはら
とよぶこえが きこえたよ
うに おもわれました
すると 天(てん)と地(ち)がわかれ
だし たくさんの
ちいさな 光(ひかり)のつぶが
この世かいに あらわれたのです
あめのみなかぬし のかみでした

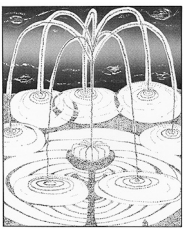
うちゅうのこころ そのものであるこのかみさまは
あらゆるところに みちあふれておられたために
だれも そのすがた かたちを とらえることができ
ません

このあと たくさんのかみさまが おうまれになりますが……

第二話

よいしょ、こらしょ

ふることに伝う。
あめのみなかぬし（天之御中主）
たかみむすひ（高皇産巣日）
かむみむすひ（神皇産巣日）
の三柱の神々『造化三神』たちによって、宇宙は始まりましたが、油のようにどろどろとしてまだしっかりと固まっておりません。まるで水の上に浮いた脂のような状態に見えます。海月のようにゆらゆらと漂っているようにも思われます。そんな泥沼のような中から、



美しい若芽が萌えるようにしてお生まれになった神様がおられます。

うましあしかびひこぢ（宇摩志阿斯訶備比古遅）の神と申しまして、すべての命の素となる神様でございます。（糀・カビ・菌）

つぎに、あめのとこたち（天之常立）の神がお生まれになられ、

「よいしょ」

と担ぐように、はるか高くまで天を押し広げ支え挙げました。この二柱の神様たちもやはり姿は見えません。

あめのみなかぬし（天之御中主）
たかみむすひ（高皇産巣日）
かむみむすひ（神皇産巣日）
うましあしかびひこぢ（宇摩志阿斯訶備比古遅）
あめのとこたち（天之常立）

ここまでの五柱の神様たちは『別天つ神』という特別な神々で、

男でもなく女でもない独り神です。

大宇宙は、今でもこの目に見えない神様たちによって支配統一されているのです。見えるものよりも、見えないものがこの世界を動かしているのでございます。

つぎに、くにとこたち（国之常立）の神がお生まれになり、地が永遠に揺らがないように、

「こらしょ」

とどっしり座り込み、大地を守りました。

こうして豊かな天と強固な大地が完成し、はてしのない広々とした宇宙空間ができあがったのです。

つぎに、とよくもの（豊雲野）神がお生まれになり、真っ白なふわふわしたいくつもの星雲に姿を変えました。この二柱の神様たちもやはり独り神で性別はなく、姿は見えないのでした。

ここにおいて大宇宙はようやく姿、形を整え始めました。そしてこのあとからは神様にも性別ができ、男と女の神様が次々と生まれてきました。

まず、ういぢに（宇比地邇）、妻のすいちに（須比智邇）のご夫婦が現れて、泥や砂をお産みになりました。その泥や砂を丸めて宇宙に漂っている星雲に投げ、星々の種を造りました。

つぎに、つのぐひ（角杙）、妻のいくぐひ（活杙）のご夫婦が現れて、その泥や砂が他の星雲に飛び出さないように杙を産んで柵を造っていきました。

つぎに、おほとのぢ（意富斗野地）、妻のおほとのべ（大斗乃弁）のご夫婦が現れて、星雲と星雲の境界を管理するために、門や戸を産んで出入り口を守られました。

つぎに、おもだる（於母陀流）、妻のあやかしこね（阿夜訶古泥）のご夫婦が現れて、あらゆるものの陰陽（男根と女陰）をつかさどり、

生産と豊饒の管理をしました。

そしていよいよつぎに登場するのが、日本人のご先祖となられる、

いざなぎ（伊耶那岐）、

いざなみ（伊耶那美）

のご夫婦の神様なのです。

なんだか神様の名前が多くてややこしいことですが、国之常立の神から伊耶那美の神までは『神世七代』と言って『高天原』の誕生にとても重要なお役目を果たされた神々でございます。以上で十七柱の大切な神々が誕生されたことになります。

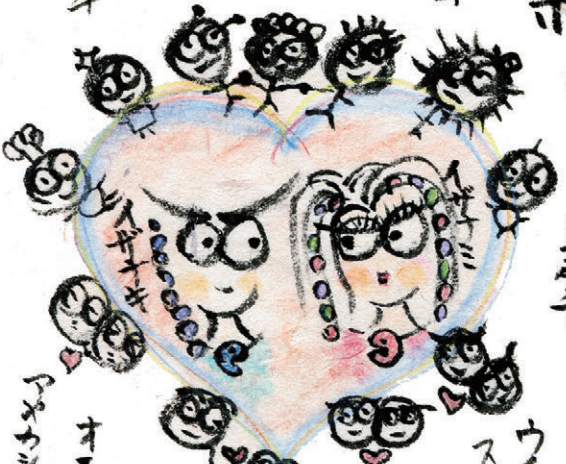
ひと息で話しましたが、ここまでは百五十億年という氣の遠くなるような長い長い年月が流れて、ようやくたどりついたお話です。

そうそう、神様を数えるのは、にん（人）ではなくて、一柱（ひとはしら）二柱（ふたはしら）と言って数えます。なにか変ですが昔からこのように言っているのでございます。

それから、強固な大地を守り固めるお役目の国之常立の神ですが、この神さまは、天から降ってきた山と万葉集に歌われている奈良県明日香の天の香具山の山頂と、元出雲大神宮の奥津城の岩座、和歌山県の秘境、玉置神社に祀られています。

では、いよいよ次から、日本の国生みがはじまりますが、そのお話はまたこの次に。

十七柱ノ神々（ジュウナナハシラノカミガミ）



第三話

いざなぎ・いざなみ

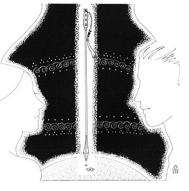
ふることに伝う。

ある日、高天原にお住まいになられている神々が全員集まり、はるか下界を見降ろしながら会議を開かれました。そして、いざなぎの神、いざなみの神、のご夫婦をお呼びになり、玉飾りのある美しい『天の沼矛』を渡し、

「あの泥海のようにただよえる国を整え固めよ」

と命じられたのでございます。

二人は天の沼矛を手に持ち、高天原と下界をつなぐ『天の浮橋』



の上から、どろどろとした海原を見下ろしました。
そして天の沼矛を降ろしてゆっくりとかき回しました。
♪こをろ。
♪こをろ。
そんな不思議な音が聞こえてきます。
そこで、さっと矛を引き上げました。すると、矛の先から塩のしずくがぽたぽたとしたたり、積もり固まり、やがて塩の球となりました。
この球はおのずからころころところがっているので『おのころ嶋』と名づけられました。地球の誕生でございます。
わたしたちのご先祖は、数十億年も前から、すでに地球が自転していることや塩の固まりであることを知っておられたのでございます。
二人はさっそく出来たばかりの『おのころ嶋』に降りていき、まず最初に『天の御柱』を立てました。天の御柱とは、神霊が昇り降

りするために立てるとても太くて高い柱で、大地と宇宙を結ぶ大切な役目をしています。そしてそれは、地球のどこからでも見ることができます。

つぎに『八尋殿』という広い宮殿を建てました。

こうして新居もできあがりひと息ついたところで、いざなぎの命は、自分自身の下半身に何か不思議なものが、ぷらんぷらんとぶら下がっているのが氣になり、

「おまえの体はどんな風になっているのか?」

といざなみの命にお尋ねになりました。いざなみは、しげしげと体を眺めて答えました。

「わたしの体はほとんど完成しているのですが、一か所だけ、ぺこん、とくぼんだ『なりなりて成り合わない』ところがあります」

「わたしの体にも一か所だけ、ぽこん、と飛び出た『なりなりて成り余れる』ところがある。そこでどうだろう、お前のくぼんだところに、わたしのとびでたところを差し入れて、国を産もうと思うが、

いかに？」
と申されました。
「はい。そうしましょう」
といざなみは、にこにこ笑って答えられました。
「では、新しい魂を宇宙からいただくために、天の御柱の周りを廻ろう」
そして、いざなぎは左から、いざなみは右から回り、二人が出会ったところで先にいざなみが、
「あなにやし、えをとこを（ああ、なんとええおとこ！）」
あとからいざなぎが、
「あなにやし、えをとめを（ああ、なんとええおとめ！）」
と見つめ合いました。
言霊といって言葉には不思議な霊力が宿っております。いい言葉を使えば幸せになり、悪い言葉を使えば不幸になっていくのです。

そこで二人は、国を産むにあたってお互いをほめたたえる言葉をかけあったのでございます。

このとき、いざなぎは、

「女の方から先に声をかけたのは良くないのでは？」

とつぶやいたのですが、あまり氣にもとめないで、宮殿の奥にある寝室へと入られ、男女の営みである『みとのまぐはひ』をされました。

やがて、いざなみは骨のない『水蛭子』をお産みになられました。二人は泣き悲しみながら、この子どもを葦舟に乗せて流し去りました。つぎに『泡嶋』が産まれましたが、やはり、泡のように浮かび漂うばかりで人の形にはなりませんでした。

いい言霊を使ったのにどうしてこのようなことになったのでございましょうか、お二人は神々にご相談するために、ひとまず高天原に帰ることとなりました。

ところで、高天原に現れたご夫婦の、いざなぎの神・いざなみの神ですが、「二人で国を生む」という重大な使命を与えられてからは、お互いに「いざなぎの命・いざなみの命」と呼び名が「神」から「命」に変わり、下界に降りて来てお働きになられたのでございます。

私たちもそれぞれ使命（氏名）を帯びて世の中に誕生し働いているのです。名前には「命」が吹き込まれているということをよくよく理解して、ひとりひとりの「命」を大切にしてくださいね。

さて、高天原に帰られたお二人の命たち、このあと一体どうなっていくのでしょうか。このお話はまたこの次に。

伊耶那岐神（イザナキノカミ）
伊耶那美神（イザナミノカミ）

『あないやし（ナント）　えをとこを（イイオトコ）』

『あないやし（ナント）　えをとめを（エヲトメヲ）』

伊耶那岐（イザナギ）と伊耶那美（イザナミ）は声（コエ）をかけ合い（アイ）

柱（ハシラ）のまわりを回（マワ）りました。

すると大きなハの鳴（ナルト）ができました。

第四話　涙から生まれた神さま

ふることに伝う。

「私たちの産んだ子供たちはよくありません。いったいどうすればうまく国を産むことができるのでしょう?」

いざなぎといざなみのご相談にたいして高天原の神々は『ふとまに』で占いをすることにいたしました。鹿の肩骨や亀のこうらを焼き、そのひび割れのぐあいによって答えを知るのです。

その結果「女から先に声をかけたのが良くない」という答えが出たので「改めてやり直すように」と伝えられました。

二人はおのころ嶋に帰ると、前と同じように男のいざなぎは左廻りに、女のいざなみは右廻りに、左右に分かれて『天の御柱』を廻り、こんどは男のいざなぎから、

「あなにやし　えをとめを」

つづいて、女のいざなみが、

「あなにやし　えをとこを」

と言霊をかけ合い『みとのまぐはひ』をされました。すると、どうでしょう。つぎからつぎにりっぱな国が産まれはじめたのでございます。

最初に、淡路島（淡道之穂之狭別）が産まれ産声をあげました。

二番目に、体がひとつで顔が四つある四国。

伊予（愛比売）

讃岐（飯依比古）

阿波（大宜都比売）

土佐（建依別）
三番目に、三つ子の隠岐の島。（天之忍許呂別）
四番目に、これもまた体がひとつで顔が四つある九州。
筑紫（白日別）
豊（豊日別）
肥（建日向日豊久士比泥別）
熊曾（建日別）
五番目に、壱岐の島。（天比登都柱）
六番目に、対島。（天之狭手依比売）
七番目に、佐渡の島。
最後に、本州である大倭豊秋津嶋。

これらの八つの嶋をまず産みましたので、日本のことを『大八嶋国』ともいうのです。また『秋津』とはトンボの古名で、トンボが交尾をしながら飛んでいる姿が本州に似ていることからついた名前なのでございます。

そのあとまだまだ産まれます。
吉備の児島、小豆島、大島、姫島、五島列島、双子の島。これらは瀬戸内海や九州にある六つの小さな島々で、ここにようやく日本の国土を産み終えました。
それが済むとお二人は『大八嶋国』に住む神様を産み始めたのでございます。
土の神。石の神。岩の神。家の神。海の神おおわだつみ。川の神。泡の神。波の神、ザブンザブン。水の神。風の神、ヒューヒュー。木の神おおやびこ。山の神おおやまつみ。野の神かやの姫。
阿礼はちょっと疲れてきました、少し休みましょう…。
霧の神。山頂の神。谷の神。暗闇の神。迷いの神、ウロウロ。天の鳥船の神、スイスイ、フワフワ、空も飛べるよ。食べ物の神おおげつ姫、パクパク。
とまあこんなぐあいにたくさん産み、その子どもたちもつぎつぎ

と子を産んで、野山には花が咲き、雨が降り、虫が鳴き、雪が降り、四季もめぐりめぐって日本はたいそうにぎやかになってまいりました。山や海、石や木や草花、そのひとつひとつに神様が宿っていったのです。

このように、いざなぎ（男）が先に声をかけ、いざなみ（女）をいざなう（誘う）ということわり（天の理）が、高天原の神々の占いで決まりましたので、以来、それに習って鳥や魚、動物などのいろんな生き物たちは、男の方から一生懸命女性を誘うようになりました。

さて、お二人はここまでとても順調にお産みになっておりました。が、つづいて火の神『かぐ土』を産んだ、いざなみに大変なことが起こりました。

火の神である『かぐ土』の強い炎に焼かれて、みほと（女陰）に大やけどを負い寝込んでしまったのです。そして、嘔吐し、大小便

をたれ流しました。すると、そのゲロ、便、尿からも神様が産まれました。

ゲロからは、鉱山の夫婦神『金山彦』『金山姫』。
便からは、粘土の夫婦神『埴やす彦』『埴やす姫』。
尿からは、水の神『みづはの女』と穀物の霊『わくむすひ』。

このわくむすひの娘が、お伊勢さんの外宮に祀られている『豊受氣比売』で、日本中の穀類が豊かに実るようにと守っておられる神様です。

こうして、高天原の神々のご命令を受けて日本の国産みをされていた、いざなぎ、いざなみですが、これまでお二人で力を合わせて十四の島々と三五柱の神々を産んでいます。

さて、いざなみの容体ですが、いっこうに治る氣配がありません。それればかりか心臓の鼓動がしだいしだいに弱々しくなり、ますます衰弱されていったのです。いざなぎは一睡もせずに妻に付きっきり

で看病をしましたが、ついにその音も消えてしまいました。
一瞬静寂がおとずれました。
「おお、なんということだ。ひとりの子の命とひきかえに、愛しいお前を失うなんて……」
その声とほぼ同時に森がざわめき大地が唸りました。
いざなぎは嘆き悲しみ、まだほんのりと温かい妻の枕元に這いまわり、足下に取りすがって泣き続けました。冷たく冷たくなるまでそうしていました。するとその涙から『泣沢女』という、もの静かで美しい神様がお生まれになったのです。
この神様は大和の国（奈良県）の天の香久山の麓『泣沢の森』に鎮まっておられます。この森の中を歩くとき、雨でもないのに冷たいしずくが落ちてくることがあると伝えられておりますのは、きっといざなぎの涙なのでございましょう。

さて、いざなみの亡きがらは、出雲の国（島根県）と伯耆の国

（広島県）の境いにある比婆の山に埋められました。また、熊野市（三重県）にある花の岩窟にもいざなみは祀られております。

さて、妻を墓に葬ってもいざなぎは、泣き続けました。泣けば泣くほど、想いは深く、寂しさはつのるばかりです。

目の前には火の神かぐ土が、母の死も知らずに、より一層炎を燃え立たせて元氣に飛び回っています。

いざなぎはすっくと立ち上がるやいなや、腰に付けていた、『あめのをははり』という名の十拳劒（一拳は握りこぶしひとつ）に手をかけ、一瞬のうちに息子の首を切ってしまわれました。

さあ、大変なことになってしまいました。このお話はまたこの次に。

火之迦具土神

ぼくは火の神さまです。

母さん（イザナミ神）のお股から産まれましたが、ぼくのせいで母さんは大火傷して死んでしまい、

黄泉という国へ旅立ちました。

おとうさん（イザナギ神）は

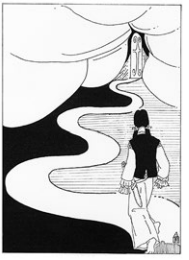
かんかんに怒って、ぼくの首を剣で切ってしまいました

「ぷっ」という音が耳にのこっています。

それから

ぼくの血は剣や龍になりました。

第五話
黄泉の国（死者の国）



ふることに伝う。
「布都！（フツッ！）」
にぶい刀音が不氣味に響きわたりました。
刀には『布都の御魂』という神霊が宿っています。だから、ものを斬るときには「フツッ」とか「ブツッ」とか「プツ」と聞こえるのでございます。

いざなぎが切り落とした火の神かぐ土の首は、炎をあげながらく

るくると宙に舞いました。あたり一面、吹き出した血で真っ赤に染まり、十拳剣にはぽたぽたと鮮血がしたたっています。まわりの岩にも血が飛び散っています。それらの血は、八柱の神へと変化しました。

まず、刀の切っ先についた血が岩にほとばしると、

いはさく（石析）、
ねさく（根析）、
いはつつのを（石筒の男）
の三柱の刀剣の神が産まれました。

つぎに、刀のつばについた血が岩にほとばしると、

みかはやひ（甕速日）、
ひはやひ（樋速日）、
たけみかづち（建御雷）
の三柱の雷の神が産まれました。

つぎに、刀の柄にあふれた血が、握っていた手指のあいだからし

たたり落ちると、

くらおかみ（闇淤加美、たかおかみ／高淤加美）

くらみつは（闇御津羽）

の二柱の雲や雨を呼ぶ龍の神が産まれました。この龍神は丹生川上神社上社（奈良県）に、また『布都の御魂』は大和の国（奈良県）にある石上神宮に祀られているのでございます。

殺された火の神の体からも神が姿を現しました。

頭には正鹿山津見（まさかやまつみ）

胸には淤滕山津見（おどやまつみ）

腹には奥山津見（おくやまつみ）

男根には闇山津見（くらやまつみ）

左手には志芸山津見（しぎやまつみ）

右手には羽山津見（はやまつみ）

左足には原山津見（はらやまつみ）

右足には戸山津見（とやまつみ）
全部で八柱の山の神々が産まれてきたのです。
余談ですが、八つ裂きというのはこの体の八つの部分をばらばらに切り離すことでございます。

さて、ひと騒動終わりますと、いざなぎは遠くの方を見つめ何か考えられている風でございました。そしてふと、
「いざなみに会いたい」
と小さな声でつぶやかれたのです。
そこでいざなぎは、いざなみを追って黄泉の国へ入っていきました。暗く、深く、冷たく、とても長い道のりでございます。
やがて、地の底、黄泉の国に着かれたいざなぎは、閉ざされた扉の前に立ちました。辺りはしんと静まりかえっています。いざなぎはその扉に向かって、静かに話されました。
「いざなみ、むかえに来たよ。一緒に帰ろう」

声はとても小さかったのですが、神殿の中にいるいざなみの耳には、はっきりと聞こえておりました。しばらくして扉が開き、薄暗い中にも一層美しく見えるいざなみが姿を見せました。

「わたしはさみしくて仕方がない。それに、一緒に造ろうとした国は、まだ出来ていないだろ」

「愛しき夫よ。こんな処までよく訪ねて来てくださいました。けれどとても残念です。もう少し早くおいでくださったら良かったのですが……。わたしは、すでに黄泉の国の食べ物を口にしてしまいました（黄泉戸喫）。だから、二度と地上に戻れないのです。でもあなたのその懐かしいお顔、やさしい声を聞くと、とても帰りたく思います。そのことを黄泉の国の神に相談してきます。もしかすれば帰れるかもしれません。その間、決してわたしの姿を見ないと約束してくださいね」

そう言い残して奥へと入っていかれたのでございます。

いざなぎは長い間、外で待っておりました。しかし、待てども待

てどもいざなみは戻ってきません。それでとうとう約束を破って中へと入っていったのです。

神殿の中は真っ暗でした。

凍りつくような冷氣が漂っています。いざなぎは左の髪に差していた魔よけのくしを取り、その端の太い歯を一本だけ折って『ひとつ火』をともされました。

炎はあたりをゆらゆらと照らし出します。

「ぎょっ」

いざなぎは立ちすくみました。あらぬ物をそこで見たのです。

いったい何を見たのでしょうか。このお話はまたこの次に。

予母都志許売

ねたしは地下にある黄泉
の国に住んでいます。とても
暗い処です。死んだものが
来る国です。ここ
に来たものは帰る
ことができません
大雷 火雷 黒雷 析雷
若雷 土雷 鳴雷 伏雷 の八種の雷
の仲間がいます。みんなやさしいです。
ヤケの子は好きです
ぶどうは好きです
桃はちょとにがてです

第六話
黄泉つ軍との戦い

ふることに伝う。

闇に灯した『ひとつ火』のわずかな明かりの中に何か醜悪な塊が見えます。よく見ると、それは腐乱したいざなみの死体でした。体にはうじがたかり、ごろごろという氣味の悪い音をたてています。

頭には大雷（おおいかづち）、胸には火雷（ほのいかづち）
腹には黒雷（くろいかづち）、女陰には析雷（さくいかづち）
左手には若雷（わかいかづち）、右手には土雷（つちいかづち）

左足には鳴雷（なるいかづち）、右足には伏雷（ふしいかづち）全部で八種類の恐ろしい雷（いかづち）神が居たのでございます。

肝をつぶしたいざなぎは、恐怖におののき、一目散にもと来た道を逃げ帰りました。

むかし、このようなことがありましたので、闇夜に『ひとつ火』を灯すことはたいへん縁起が悪いということになったのでございます。みなさん、暗闇で灯をともすときには、魔物を見ないようにくれぐれも氣をつけましょう。

さて、腐りかけの恥ずかしい姿を見られたいざなみは、逃げていくいざなぎに向かって、

「見るなと云うたに、なぜ見た！」

と怒り狂い、よもつしこめ（黄泉醜女）という醜悪な女にあとを追わせました。

よもつ醜女は、みるみるいざなぎに追いついていきました。

いざなぎは、追ってくるよもつ醜女に向かって、髪をくくっていた黒いつる草をほどいて、エイッと力いっぱい投げつけました。つる草は地面に落ちると何本ものつるを勢いよく伸ばし、そのつるに、

ぷるるん、ぷるるん、ぷるるん、

とたくさんの山ぶどうの実をつけました。よもつ醜女は追うのをやめて、餓鬼のようにぶどうに食らいつきました。開けた大きな口はまるで洞窟のようで、歯がまったくありません。ぶどうはそのまま丸呑みにされていきます。

そのすきにいざなぎは逃げました。

よもつ醜女はぶどうをあっという間に食べつくして、また追ってきます。

こんどは右の髪に差していた竹櫛を投げつけました。竹櫛は地面に落ちると、ころころと転がり、

ぽんっ、
と竹の子に変わりました。よもつ醜女が、むしゃむしゃがつがつと竹の子を食べている間にまたいざなぎは逃げます。
まったく頼りにならないよもつ醜女を見ていざなみは、八種の雷（いかづち）神と千五百の黄泉つ軍を新たに増やして追わせました。
軍勢は見る間に追いついていきます。
いざなぎは十拳釼を抜き、それを後ろ手に振りながら必死で逃げました。こうすれば相手にまじないがかかり、敵の氣力がなえるのです。そしてそのとおりに軍勢の追う勢いが衰え始めました。

いざなぎと軍勢の距離は少しづつ開いていきます。
そして、いざなぎはようやくあの世とこの世の境にある『黄泉つひら坂』にたどり着いたのでございます。
そこには一本の桃の木が生えており、まだしつこく追ってきてい

る軍勢に、その桃の実を三つ取って、ぽんぽんぽんと投げました。すると不思議なことに黄泉の軍勢たちは皆、桃を嫌ってザーッと逃げ帰りました。命びろいをしたいざなぎはその桃に向かって、

「わたしを助けたように、この国で苦しい目にあって悩んでいる者がいたら、これからも助けてあげなさい」

と言い、この邪氣を払う桃の木に『おほかむづみの命』という名をさずけられたのでございます。このお話が、おとぎ話「桃太郎」の原型となりました。

さて、一人になってもまだいざなみは、髪を振り乱しながらものすごい形相で追ってきていました。そこでいざなぎは、千人がかりでないと動かせない『千引きの石』という大石を動かし『黄泉つひら坂』を塞いでしまわれました。

いざなみといざなぎは、その大石を挟んで大声でののしりあいました。

「いとしい夫であるいざなぎよ、こんなことをするのなら、あなたの国の人たちを毎日千人しめ殺してやる！」

「愛しい妻よ、おまえがそうするなら、わたしは毎日千五百人の子どもが産まれるように産屋を立てよう！」

そんなわけで、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まれるようになったのでございます。

これが日本で初めての夫婦げんかでございます。やれやれ、困ったものでございます。

そんなこんなで、黄泉の国にとどまったいざなみを黄泉津大神（よもつおおかみ）と呼び、ふさいだ大石を道返之大神（ちがえしのおおかみ）と呼ぶようになりました。

この黄泉つひら坂は、出雲の国の『いふや坂』だろうということでございます。

ところで一説によると、この喧嘩の最中に白山菊理姫（しらやま

くくりひめ）という女神がどこからか現れて、二人の仲をとりもつために、いざなぎの側に寄り、耳元でなにかひそひそとささやきました。それを聞いたいざなぎは「しか善けむ（それは善いことだ）」とうなづかれたとのことでございます。

しかし、白山菊理姫が何をささやいたのかは今だに謎のままとなっております。この言い伝えが石川県の白山比咩神社に語り伝えられております。

このあとのお話はまたこの次に。

意富加牟豆美命（オオカムズミノミコト）

わたしは桃（モモ）の木（キ）です。『黄泉（ヨモ）つひら坂（サカ）』

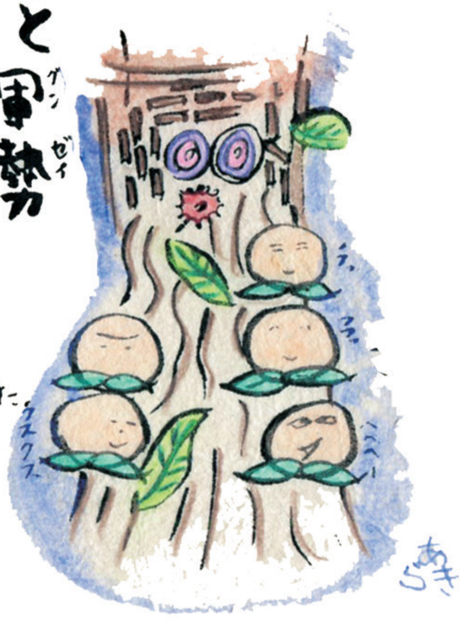
にはえてます。

このあいだ、黄泉（ヨミ）の国勢（クンゼイ）に追（オ）い

かけられていたイザナギの神（カミ）が

私（ワタシ）の桃（モモ）の実（ミ）を

三つ取って投げつけました。すると軍勢は、桃を嫌って逃げ帰ってしまいました。イザナギの神は、私に向かって『おおかむづみ』という名前をつけてくれました。大神の実という意味です。大変気にいっています。



第七話
両目と鼻から生まれた尊い神

ふることに伝う。
黄泉の国からよみがえったいざなぎは、
「わたしは何と汚い国に行っていたものか。この汚れを払うために『みそぎ』をしなくては」
と言い、身を清めるために、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に行きました。そこは清涼な河の水が、大海へとそそぎこんでいる入り江になっています。ここは汽水域といって真水と海水が、比重の関係で上下に分かれて混ざり合っている不思議な場所で、生命が

進化するのにとても重要なところなのでございます。

そこで、いざなぎは身につけていたものを全部脱ぎ捨てられたのでございます。するとそれらの物から次々と神様が誕生しました。

まず、杖を投げ捨てると、魔をよける道しるべの神が、
帯を投げ捨てると、長い道をふさぐ岩の神が、
袋を投げ捨てると、ものを解放する神が、
衣を投げ捨てると、疫病神が、
はかまを投げ捨てると、二又に分かれた道の神が、
かんむりを投げ捨てると、餓鬼が、
左の腕飾りを投げ捨てると、三柱のたたり神が、
右の腕飾りを投げ捨てると、三柱のけがれ神が現れました。

こうして裸になられたいざなぎは、今度は水の中に入って体を洗い清めようとされました。

「上流は流れが速過ぎる。下流は遅い」

そう言って、中流へと入っていきました。

体を洗っていきますと、黄泉の国で付いた垢から、二柱の禍（わざわい）の神が生まれて流れていきました。つづいて、禍を直す三柱の神（神直毘の神・大直毘の神・伊豆能売の神）が産まれ、禍の神を追いかけていきました。

いざなぎは、さらに深みへと入り潜っていきました。

海底で体をぶるぶると震わせてすすぎますと、

底津綿津見の神と底筒之男の命が、

中ほどでぷるぷると震わせてすすぎますと、

中津綿津見の神と中筒之男の命が、

水面でふるふると震わせてすすぎますと、

上津綿津見の神と上筒之男の命がそれぞれ産まれたのでございます。

綿津見（わたつみ）の神は龍宮の守り神で、筑紫（九州）の海人族の祖先になられた神様です。筒之男（つつのを）の命は航海の神様で、

なにわの墨の江に居られる住吉大社の三神でございます。

なお『つつ』とは潜水中に吐く息が泡つぶのようになって「つつ……」と昇っていくさまをいうのです。また、夜空にきらめく星も泡粒のように見えるので、古代は星のことも「つつ」といっておりました。筒之男の三神は、星をたよりの航海にはかかせない神でした。

このように、海や川の中に入り、水の霊力によって体に付いた汚れを払うという『みそぎ』の風習は、相撲の力士が土俵に塩をまいたり、葬儀の後の『清めの塩』として今も形を変えて伝わっているのでございます。

いざなぎは、こんな風にして黄泉の国の汚れを払う『みそぎ』をされまして、最後に顔を洗いました。

左の目を洗うと、太陽の神、天照大御神が、

右の目を洗うと、月の神、月読の命が、

鼻を洗うと、嵐の神、建速須佐之男の命が、お産まれになりました。

この三柱の神々は、いままでに産んできたどんな神々よりも光り輝き、生命力にあふれておりました。いざなぎは、

「わたしはたくさんの神々を産みつづけてきたが、しめくくりに、もっとも貴い三柱の神々を得た」

とたいそう喜ばれたのでございます。

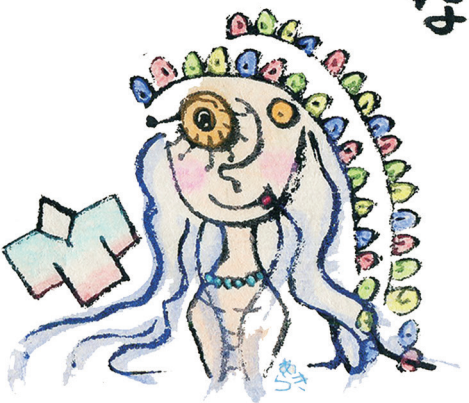
ここまでで、いざなぎといざなみの産んだ神様の合計が八十一柱（九×九）となり、国造りが完成したのです。かけ算も九九＝八十一で完成します。この、神様と数の不思議な関係は数霊（かずたま）という学問にもなって日本に伝わっております。

そこで、八十一柱の子どもを産み終えたいざなぎは、高天原の神々から命じられていた国造りの役目が済みましたので、ご自分が身につけていた、美しい玉の首飾りを取りはずし、

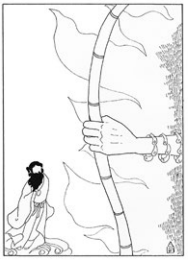
「これからのことは頼みましたよ」
と天照大御神に譲りました。
それは、ゆらゆらと揺れては、いい音色を奏でるのでした。首飾りの名は『みくらたな之神』と申しまして、稲の霊が宿っておりました。
いざなぎは、光り輝く天照大御神に、
「あなたは、高天原を治めなさい」
もの静かな月読の命に、
「あなたは、夜の国を治めなさい」
すえっこの須佐之男の命には、
「あなたは、海原を治めなさい」
と命じられたのでございます。しかし、このいいつけに須佐之男はふまん顔でした。さて、このお話はまたこの次に。

瀬織津比売

上流の、澄んだ水の、岩だらけ
の、激しい流れの、そんな
処におりまして
あなたの罪穢
を祓います。
人形の撫物
につみけがれを移して
流して下さいな。



第八話
暴れ者の須佐之男



ふることに伝う。

天照大御神は、すべてのものに伸びる力と喜びの光りを平等にふりそそぎ、月読は、満ち欠けしながら静けさとやすらぎを与えておりました。こんな風にして、二人は、いざなぎから与えられた国をしっかりと治めていました。

ところが須佐之男だけはなにが不満なのか、ただ泣きわめいているばかりでございます。ひげが胸元に届くほどに年月が過ぎ去っても、まったく変わらないご様子です。

須佐之男は、豊かに満ちあふれていた、川、海、森の水分を自分の体に吸い上げて、涙として流し続けています。あまりに泣き続けるものですから、川、海、山は枯れてしまい、からからと荒れた国になってしまいました。

そのために『もののけ』が、蠅がむらがるように押し寄せ、不氣味な音をたてて騒ぎはじめたのです。疫病がはやり、わざわいも数知れず起こるようになってまいりました。

困ったいざなぎは、須佐之男のところにやって来ると、息子の顔をのぞきこみました。

「お前はどうして国を治めずに、いつまでも泣きわめいているのか？」

すると須佐之男はよけい大声で泣き、ひっくり返って手足をばたばたさせて、

「俺はこんなところはいやなんだ！　母の住んでいる根の国に行

きたいよー」

とますますだだをこねだしました。いざなぎは、こんな息子の様子を見てあきれてしまい、

「そんな弱虫はこの中つ国に住んではならない！　どこかへ行ってしまえ！」

と顔を真っ赤にして怒り、須佐之男を果ての果てまで追っぱらってしまわれたのです。

我が子を追放したいざなぎは、たいへん氣落ちされ、しばらくののち、淡海の多賀に隠居されました。その場所は、近江の国（滋賀県）の多賀大社とも淡路島の多賀にある伊弉諾神宮ともいわれております。

さて、父にしかられて追放された須佐之男は、根の国に行く前に「姉の天照大御神にお別れのあいさつをしてこよう」とお考えになり、高天原へと昇っていきました。

その勢いは大変なものでしたから、須佐之男が高天原に近づくにつれて、山、森、河はどよめき、大地はゆさゆさと激しく揺れ動きました。

天照大御神はこの大音響に驚き「須佐之男がやって来るのはきっとわたしの国を奪おうとしているのだ」と思いました。それですぐに戦の支度を始められたのでございます。

まず長い髪を解かれまして、男がする角髪に巻き、その左右の角髪にも、髪飾りにも、左右の手にも、たくさんの美しい勾玉がついたみすまるの珠を巻いたのです。

背中には、千本の矢が入る筒を、わき腹には五百本の矢が入る筒をつけられました。

さらに左手首には、弓を射ると弦の反動を受けて、敵を威圧するような高い音のでる道具をつけました。

このように男の戦の格好をし、威風堂々として地面を踏み込むと、土煙が淡雪のように舞いあがりました。そして威勢よく弓を

振り上げ、

「うおぉー」

と男のような雄叫びをあげ、須佐之男の来るのを待ち受けたのです。

そんなこととは知らずに須佐之男は、のんきな顔で高天原にやって来たのでございます。

天照大御神は弟の姿を見つけるやいなや、

「どういうわけで昇って来られたか！」

と大声を発しました。

さて、いったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。

建速須佐之男神

ぼくは伊耶那岐神の鼻から
産まれた須佐之男です。強いです。
大海原にだいたい居ます。
くしゃみをすると
大風で海がさわいで

船がひっくり返ったり
します。みんな困っている
ようですが気にしません。
あと八俣大蛇を退治
したこともあります。
その時は力だけではなく、ちょっと
頭も使いました。

第九話
天の安の河（天の川）でのうけひ

ふることに伝う。

「高天原を乗っ取るつもりか！」

ものすごい怒声に振り返った須佐之男は、弓矢をつがえた姉の姿を見つけて大変驚き、

「わたしは、高天原を奪いにきたのではありません。根の国に住む母のところへ行く前に、お姉さんにあいさつをしに来たのです」

「お前が嘘をついていないと証明できますか！」

須佐之男はすこし考えて、

「ひとつあります。互いに『うけひ』をして子どもを産み、神様にどちらが正しいか判定してもらいましょう」

このように提案しました。

『うけひ』というのは、あらかじめある物事を神に約束しておいて、その約束どおりの結果が現れるかどうかで、神意を占うことでございます。須佐之男は「それぞれ別々に子を産む」ということをして、その結果で勝ちか負けかを判断しようとしたのです。

そこで二人は、美しい星々が集まっている『天の安の河（天の川）』の両岸に分かれて立ちました。

回りでは高天原の神々が、どうなることかと心配顔で見守っています。

まずさきに天照大御神が、須佐之男の剣をもらい受け、三つにへし折り『天の真名井』の聖なる水ですすぎました。そして、その剣を歯でがりがりと噛み砕き、ぷーっと吐き出すと息吹が霧のように

広がり、その中から、三柱の海を守る姫神が産まれたのです。

長女は、たぎり姫（多紀理姫）。
次女は、いちきしま姫（市寸嶋姫）。
三女は、たぎつ姫（多岐津姫）。

この三姉妹は『宗像三女神』と呼ばれて、肥の国（福岡県）の宗像郡にある、沖の島・大島・宗像大社にそれぞれ祀られております。

とくに玄界灘に浮かぶ沖の島には古代の祭祀場である石座があり、たくさんの宝物が出土し、海の正倉院と呼ばれています。

この島は今でも、神々と神主以外は誰も足を踏み入れることができない禁足地なので、いまだに神々しいご神氣が島中に漂っております。

また、次女のいちきしま姫は『弁天さま』とも呼ばれて、宮島

（広島県）、江ノ島（神奈川県）、琵琶湖の竹生島、吉野の奥の天河などに祀られているのでございます。

さて、つぎに須佐之男が、天照大御神の身体につけていた五種類の珠飾りをもらい受け『天の真名井』ですすぎ、ばりばりと噛み砕き、ぷーっと霧のように吐き出しますと、五柱の男神が産まれました。

左の髪に巻いた珠飾りから産まれた長男は、
あめのおしほみみ（天の忍穂耳）と申します。
右の髪に巻いた珠飾りから産まれた次男は、
あめのほひ（天の穂日）。
額に巻いた珠飾りから産まれた三男は、
あまつひこね（天津日子根）。
左の腕に巻いた珠から産まれた四男は、

いくつひこね（活津日子根）。
右の腕に巻いた珠から産まれた五男は、
くまのくすび（熊野久須毘）。

ところで長男の正式な名前は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命と言って「まさに勝った。私は勝った、素早く勝った」という意味なのです。

そこで、天照大御神は、自分が勝ったと確信して、

「五柱の男神は、わたしの珠から産まれたのでわたしの子です。三柱の姫神は、剣から産まれたからおまえの子です」

と言われたのです。ところが、須佐之男はその言葉を聞くなり、飛び上がって喜び、

「それならこの『うけひ』はわたしの勝ちだ。邪心がないから清らかで、か弱い女の子を得たのだ。これでわたしの潔白が証明された」

と自分勝手に解釈して、

「勝った！　勝った！」

とはしゃぎまわったのです。

よくよく考えてみれば、お二人は『うけひ』をする前に男を産んだ方が勝ちだとか、女を産んだ方が勝ちだという取り決めをされてはいなかったのです。

早がてんした須佐之男の喜びようは尋常ではありません。田畑を壊し、溝を埋め、あげくの果てには、神々の台所にまで大便をまき散らしふざけ回りました。

けれども天照大御神はとがめないで、やさしく、

「糞のようなのは、酒に酔って吐きちらしたゲロでしょう。田のあぜを壊して溝を埋めたのは、耕す土地を増やそうとしたのでしょう」

と他の神々から弟をかばわれました。

そんな姉の心を知らず、調子にのった須佐之男の乱暴は、ますま

すひどくなるばかりです。

まだら模様の馬の皮を生きたまま逆はぎにして、天照大御神がお仕事をされている機織り小屋の上に登り「えいっ！」とばかりに天井から投げこんだのです。

部屋にいた機織り女はたいそう驚き、氣絶してその場に倒れ込んでしまいました。その拍子に手に持っていた梭（両端の鋭く尖った横糸を通す木の道具）を取り落としてしまい、それが運悪くほと（女陰）にぐさりと突き刺さり死んでしまいました。天照大御神はそのありさまをすぐ近くで見ておりました。

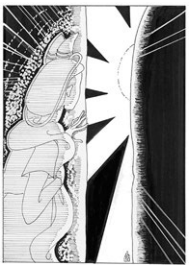
そもそも機織り小屋は神様の衣を織るための神聖な場所です。そこを血で穢したうえに死人までだしたのです。天照大御神は、このとんでもないことをしでかした須佐之男の行いに、激怒し、嘆かれました。しかし、悲しみのあまり怒る氣力も失せたようで、ただ黙ったまま外に出られると、そのまま『天の岩戸』にお隠れになら

れてしまいました。
　するとどうでしょう。高天原は夜のように真っ暗になってしまったのでございます。
　さあ大変なことになってしまいました。このお話はまたこの次に。

市寸嶋比売命

あまてらす大御神が
すさのおの剣を
三つにへし折りました
それを天の真名井の水で
すすぎました。
口にほうり込んで
ガリガリかみくだきま
した。霧のようにふ〜っ
と吹き出しました。
たぎり姫が産まれました。
わたしが産まれました
たぎつ姫が産まれました。
わたしたちは海を守る女神です

第十話　天の岩戸開き



ふることに伝う。

高天原にある天の岩戸に天照大御神がお隠れになってしまわれたために、高天原と中つ国から太陽の輝きが消え失せ、すっかり暗闇に覆われてしまいました。そのために神々の不満や怨差の声が聞こえ初め、たくさんのわざわいが起り出しました。

「どうすれば天照大御神を岩戸からつれ出すことができるだろうか」

非常召集令によって天の安の河原に八百万の神々があつまり、解決策をねるために、高天原会議を開くことになったのでございます。その席で『造化三神』の一人『たかみむすひ』の神の子で、高天原一の知恵者、思金（おもひかね）の神が名案を出しました。八百万の神々も満場一致でその意見に賛成し、さっそく準備が始まりました。

まず、太陽の使いの長鳴鳥を集めて、いっせいに「アサー」と鳴かし、

また、高天原の堅い石を取り、くろがねを造り、ひとつ目の鍛治職人あまつまら（天津麻羅）に鉄を打たせ、

また、鏡造り職人いしこりどめ（伊斯許理度売）に命じて大きな『八尺鏡』を作らせ、

また、玉造職人たまおや（玉祖）に命じて『八尺の勾玉のみすまるの珠飾り』を作り、

また、あめのこやね（天児屋）、ふとだま（布刀玉）に命じて天の

香久山のははかの木（朱桜の木）を燃やして鹿の肩骨を焼いて占いをし、

また、天の香久山のさか木を根こそぎ掘り取って、その上の枝に『勾玉のみすまるの珠飾り』を取りつけ、中の枝に『八尺鏡』をかけ、下の枝に『白と青の幣』を垂らして、ふとだまが持ち、

また、あめのこやねが天照大御神出現祈願の祝詞を唱え、

また、あめの手力男が岩戸のわきに隠れ、

天照大御神を誘い出す大宴会の準備は大わらわです。

こうして、岩戸の前には八百万の神々が、わいわいがやがやと勢ぞろいされました。

そこへ登場してきたのが神々の人氣者、あめのうずめ（天宇受売）でございました。天の香久山のひかげのかづらをたすきにかけ、まさきのかづらを髪飾りにし、魔よけの笹の葉を手に持っています。

そして、ステージがわりの大きなおけを伏せてその上に乗り、と

んとんリズムをとりながら面白おかしく踊り始めました。おけは打楽器のように大きな音を鳴り響かせています。調子に乗ったあめのうずめは、しだいしだいに神がかり状態になり、踊り狂い出したのでございます。

乳は左へ右へ、上へ下へと揺れ動き、裾はめくれて女陰はあらわに見え隠れしました。

日本初のストリップでございます。そのようすがとてもおかしく、神々はお腹をかかえてどっと笑ったのです。『咲ひ』と踊りは、邪氣を払う呪術のひとつでもあるのです。そのどよめきは大音響となり高天原中に響きわたりました。

それればかりか、あめのうずめにつられて八百万の神々も立ち上がり、思い思い体をゆすって踊り出し、岩戸の前のにぎやかさは今やたけなわです。

「世の中は暗く嘆いているはずなのに、どうして外はにぎやかに笑い踊っているのだろうか？」

岩戸の中の天照大御神は不思議に思い、そっと戸を細めに開けました。

それを見たあめのうずめは、すかさず、

「あなたさまよりも尊い神がおられるので、うれしくなって皆でえらぎあそんで（歓喜咲楽）いるのですよ」

とくるくる舞い踊りながら答えました。そこへさっと、ふとだまとあめのこやねの二人が、いしこりどめの作った大きな鏡を差し出し、天照大御神の姿を映しました。天照大御神は、鏡に映ったのが自分だとは知らずに、もっとよく見ようと少しずつ岩戸から体をのり出されたのです。

余談ですが、伊勢神宮では今もこの天の岩戸開きのご神事を再現し、二十年に一度の式年遷宮の時、暗やみの中で神官がご正殿の前に正座し「カケコー！　カケコー！　カケコー！」と三度、天の長鳴き鳥の鳴きマネをしてからおもむろに御扉を開き、ご神体の鏡

を取り出しているということでございます。

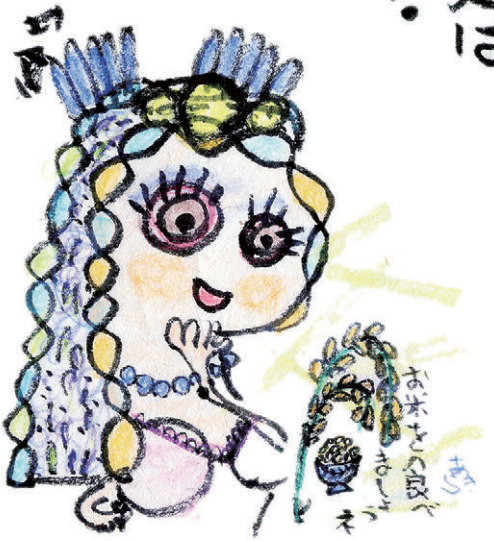
それから祝詞を奏上した「あめのこやねの命」ですが、枚岡神社（大阪府）・春日大社（奈良県）にお祀りされています。枚岡神社では、毎年新しい七五三縄の下で大笑いするという岩戸開きのご神事が斎行されています。

また、現在では伊勢の天照大御神への一番大切なお供え物はあわびとされておりますが、古代はあわびの中に偶然の産物として育まれた天然の真珠を不老不死の秘薬として大変珍重していたのです。そこで、神代にはあわび玉（真珠）のついたあわびをお供えし、天照大御神の力が二度と衰えることのないようにとの願いを込めてお祀りしていたのでございます。

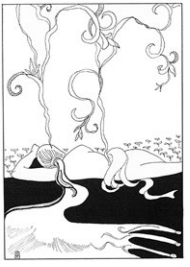
さて、余談が長くなりましたが、「岩戸開き」のものがたりは、このあといったいどうなっていくのでしょうか？

このお話はまたこの次に。

天照大御神
すんでいる処は
高天原です。
すべての物に
生命の
エネルギー
をそそ
いでいます。
それから、私はイザナギの
左目から生まれました。



第十一話
尻に大豆、ほと（女陰）に麦



ふることに伝う。

外にもう一人のたいそうりっぱな神様がいることを不思議に思われた天照大御神は、岩戸からほんの少し体を乗り出しました。その瞬間、隠れていた手力男が天照大御神の手をつかみ、怪力でぐいと外に引っぱり出したのです。そして、すぐに太玉命が岩戸に、宇宙創生の神である造化**三**神、別天つ神**五**柱、神世**七**代の宿っている『しめ縄（**七五三**縄）』を張り、

「これで二度とお隠れになることはできません」

と岩戸の前に立ちふさがりました。

このとき、怪力の手力男が力まかせに岩戸を開けたので、その勢いで戸がはずれて下界に落ちてしまいました。はずれた戸の落ちたところが信州の戸隠山だといわれております。

高天原一の知恵者、思金（おもひかね）の神のはかりごとは、こんな風につつがなくとてもうまく運びました。このようなわけで高天原と中つ国に光がふりそそぎ、ふたたび明るくなったのでございます。神々は、太陽の神、天照大御神のすばらしさを前にも増してほめたたえました。

昔から、暗いときには楽しく笑い遊ぶことが最良の方法（笑う門には福きたる）だったのでございます。

お手柄のあめのうずめは、このとき以来、芸能の神、お神楽の元祖となりました。

また、しめ縄（七五三縄）には「もう二度と太陽が隠れませんよ

うに」という願いが封じ込められているのです。新しい年の初めに太陽の復活を祝ってしめ飾りをする習慣は、こうして神代からずっと続き「今年も太陽の恵みをいっぱいいただけますように」という思いを込めて初日の出を拝むようになりました。

この、天照大御神は伊勢神宮（内宮）のご祭神としてお鎮まりになっておられます。また、一説によると、天照大御神がこもられた岩戸は、宮崎県の高千穂にある天の岩戸神社に、いまも残っているということでございます。

さて、このような騒動になったのは、もとはといえば須佐之男が原因です。神々は須佐之男の処分をどうするか相談いたしました。そして、二つの刑を決められたのです。

ひとつは山のようにたくさんの物品を差し出すこと、ひとつは須佐之男の髭と手足の爪を切り、けがれを払うというものでした。

神々は、それらをとどこおりなく済ますと須佐之男を放しまし

た。

大騒ぎも静まりようやくひと息ついた神々は、空腹を覚えたので食べ物の神おおけつ姫（大宣都比売）に、おいしい料理を作ってくれるように頼みました。

おおけつ姫は、はな、くち、大きなお尻から食べ物を取り出してごちそうを作る不思議な女神です。そこで、さっそくはりきって料理に取りかかりました。

まず、おしりから、五色のお米をとり出してご飯を炊きました。また、おしりから山いもを取り出して口に放り込み、ぐちゃぐちゃとよく噛んで、それをよだれのように垂れ流し、おいしそうなとろろ汁を作りました。鼻からは、あずきや栗をまるで鼻くそのようにほじくり出して、ぐつぐつと煮込んでいます。

ほんとうに楽しそうに歌を口ずさみながら、美味しいものをつくろうと一生懸命です。

偶然通りかかって、その光景をのぞき見ていた須佐之男は、

「おえっ。
なんと汚いことをするやつだ。あれを食べろというのか！」
と言うなり駆け寄り、大きなお尻のおおけつ姫を剣で斬り殺してしまったのでございます。
殺されてもさすがに食物の神様です。死体からは食べ物がどんどん出てきます。
頭から蚕が、
目からは稲が、
耳からは粟が、
鼻に小豆、
ほと（女陰）に麦、
尻に大豆が生じました。
死体に成ったこれらを、宇宙を創造された造化三神の一人、かむみむすひの神が採って、種とされました。それがいまわたしたちの食べている五穀と養蚕の起源ということでございます。

このおおけつ姫さまは、阿波の国（徳島県）の神山町にある、上一宮大粟神社の御祭神としてお祀りされています。

さて、堪忍袋の緒が切れた神々は、またもや乱暴を働いた須佐之男を、ついに高天原から下界（中つ国）へと追放しました。

というわけで須佐之男は、出雲の肥の河の上流、鳥髪というところに降りたちました。そこには大きな川が流れております。

須佐之男はその川に箸が流れてくるのを見つけ「川上に人が住んでいるに違いない」と思い、上流へと上っていきました。

箸を使って食事をするという風習は、神代からすでに日本の人々の生活習慣として根づいていたのでございます。

しばらく歩いていくと、老夫婦が麗しい乙女を真ん中にして、しくしくと泣いているのに出会いました。

いったいどうしたというのでしょうか。このお話はまたこの次に。

大気都比売神

おいしい食べ物を作る神さまです

お尻から魚を出しました。
口からごはんをはき出しました。
鼻から獣を出しました。
焼いたり煮込んだりして
大きなお皿に盛りつけました。

須佐之男神は
「汚い物を食べさせるやつだ」と怒って
食べ物の神さまを殺しました。
その死体から、稲 小豆 麦 栗 大豆
の五穀が生じました。

第十二話　八俣の大蛇（おろち）退治

ふることに伝う。

川の上流で泣いている老夫婦と乙女を見つけた須佐之男は、不思議に思いたずねました。

「お前たちは何者だ？」

「わたしは国つ神『おおやまつみの子』で名前はあしなづち（足名椎）、妻はてなづち（手名椎）。娘はくしなだ姫（櫛名田姫）と申します」

「なぜ泣いているのか？」

「わたしたち夫婦にはもともと娘が八人おりました。しかし毎年高志の国（北陸地方）から八俣のおろちがやって来て、一人ずつ娘を喰らっていくのです。もうこの娘ひとりしか残っておりません。そのおろちが、もうすぐやって来るのです。最後に残った、たった一人のこの娘ともお別れかと思うと悲しくてなりません」

「おろちとはどんな形をしているのか？」

「目はほおづきのように赤く、胴体はひとつで、八つの頭、八つの尾があります。からだには苔や檜、杉が生え、その大きさは八つの谷と峰をまたぐほど。腹はいつも血でにじみただれております」

「よし、わたしがその八俣のおろちを退治しよう。ところで娘をわたしの妻にくれないか」

「えっ？　あなた様は、どなた様でしょう？」

「わたしは、天照大御神の弟だ。いま高天原から降りてきたところだ」

「それは恐れおおいこと、そのような方なら喜んで娘を差し上げま

しょう」

須佐之男はそれを聞くと、娘をぱっと櫛に変え、髪の毛に差してしまわれました。そして老夫婦に、

「八塩折りの酒（とても濃い酒）を造り、垣根を張りめぐらせて八つの門を作れ。それぞれの門に台を作り、上になみなみと酒を注いだ酒樽を置くように！」

と指示されたのです。

やがて準備も整い、須佐之男が隠れて待っておりますと、あたりのようすが一変し、空には不氣味な黒雲がたれこめ、稲妻が光り、雷鳴が響きました。地鳴りがし、木の裂ける大きな音が聞こえたかと思うと、四方の山が突然崩れ落ち、周囲から八つの鎌首をもたげた、すさまじい形相の八俣のおろちが現れたのです。おろちがひとたび息を吐けば、それは嵐となり、大岩が飛んでいきます。

須佐之男はその様子を息を殺してごらんになっておりました。

おろちの八つの頭は、地を這い空をうかがい、なにやら捜している風でした。そして、あたりに漂う、うまそうな酒の匂いにつられて、八つの頭を八つの酒樽につき入れ、飲み始めました。

おろちは赤い目をさらに赤く充血させ、ぺちゃぺちゃがぶがぶとのどを波打たせながら飲みほしてしまいました。そうしてしたたかに酔い、大いびきをかいて寝てしまったのです。

そのときを待っていた須佐之男は、用心しながらそっと、おろちに近づき、十拳剣を抜いて、

ひ・ふ・み・よ・い・む・な・や、

とおろちの八つの頭をばらばらに斬り落としてしまわれました。胴体からは血がどうどうと噴き出しています。血の海の中におろちの首がごろんごろんと転がっております。

流れ出た大量の血は川に流れ込み、真っ赤に染まってしまいました。このおろちの血で緋色に染まった川を『肥の河』と人は呼びま

した。

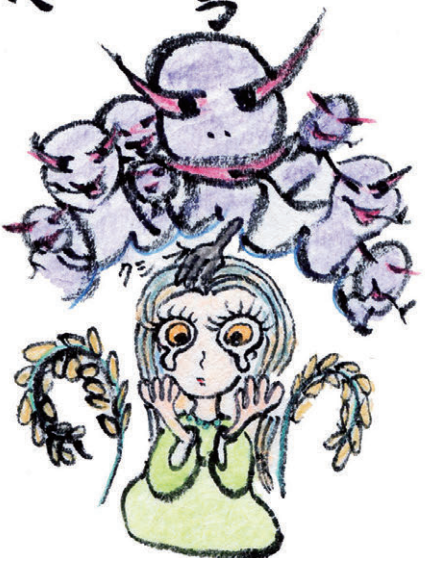
つぎに、須佐之男はとどめをさそうと思い、八つの尾を順番に斬り落としはじめました。そして、真ん中の尾を斬り落とそうとしたときに「カキッ」という音がして、剣の刃がかけてしまいました。

どんなものでも斬ることのできる、この十拳剣の刃がこぼれるはずはありません。不思議に思って蛇の尾を裂いてみますと、そこにはひとつの大刀が、らんと輝いて収まっているのでした。

さてこれは一体なんでしょうか？　このお話はまたこの次に。

櫛名田比売（クシナダヒメ）

わたしは稲田（イナダ）を
守（マモ）っている巫女（ミコ）
です。大蛇（オロチ）に
食べられてしまう
と思（おも）ってたら
スサノオの命（ミコト）に
助（タス）けられました♡



第十三話
八雲立つ出雲

ふることに伝う。

八俣のおろちをみごとに退治した須佐之男は、まん中の尾から、美しく光る大刀を手に入れました。渦の模様がついており、みるからに特異なもののように見えます。須佐之男は、高天原でさんざん迷惑をかけたおわびに、天照大御神にこの大刀を献上することにいたしました。

これが、のちに大和朝廷に伝わって三種の神器のひとつとなった『草なぎの剣』なのでございます。この剣は、尾張の国（愛知県）

の熱田神宮にご神体としてお祀りされております。

さて、高天原では乱暴ばかり働いていた須佐之男ですが、ここでは英雄です。それに、くしなだ姫という美しい妻も得て、とても幸せそうなごようすでした。

ある日、お二人が出雲を歩き回り、新居をさがし求めていたとき、見晴らしの良い土地に出くわしました。そこは大地から目に見えないエネルギーが吹き出している神聖な所でした。

「おおっ。ここはなんとすがすがしいところだろうか」

と須佐之男はそう言って、その地を須賀と名づけ、そこに立派な宮殿をお建てになられたのでございます。

自然と共に暮らしていた古代の人々は、このような場所を直感で感じることができ、そこを聖地として代々大切に守ってきたのです。その場所が神社や鎮守の杜となって日本の各地にたくさん残っているのでございます。

やがて宮殿が完成したとき、お二人のご結婚を祝福するかのような雲が、幾筋もむくむくと立ち昇りました。その情景を、須佐之男は歌に詠まれました。

八雲立つ　出雲八重垣
妻籠みに　八重垣作る
その八重垣を

この三十一文字から和歌がはじまり、万葉集、古今和歌集などへと受け継がれていきました。そして、ごく自然に人々の間に歌を詠むことが流行りだし文化として定着し、中つ国（日本）は歌詠みの国とまでいわれるようになったのでございます。

須佐之男は、くしなだ姫の父親、あしなづちを須賀のこの宮殿の長老に任命し、稲田の宮主、須賀之八耳の神と名づけました。

やがて、須佐之男とくしなだ姫との間に子どもも産まれ、名を

『やしまじぬみ』とつけられて、出雲の土地神となりました。子孫も繁栄し、末永く幸せに暮らしました。

また、須佐之男は他に、おおやまつみの娘「神大市姫」とも結婚されて『大年の神』『宇迦の御魂の神』を産んでおられます。

『神大市姫』は市場の神様。

『大年の神』は一年間の稲の豊作と恵みをもたらして下さる年神様。

『うかのみたまの神』は稲の守り神で、お稲荷さん（稲成り）の本来の姿なのです。だからお稲荷さんに商売繁盛や現世利益をお願いするのは、ちょっと見当違いなのでございます。

さて、ここからが少しややこしくなってきますので、よく聞いていてくださいね。阿礼も何とかわかりやすくお話するように頑張りますから。いいですか。

須佐之男とくしなだ姫の子どもの、

『やしまじぬみの神』は、おおやまつみの娘「このはなちる姫」を妻にして『ふはのもぢくぬすぬの神』を産み。

『ふはのもぢくぬすぬの神』が、おかみの神の娘「ひかは姫」を妻にして『ふかふちのみづやれはなの神』を産み。

『ふかふちのみづやれはなの神』が「あめのつどへちねの神」を妻にして『おみづぬの神』を産み。

『おみづぬの神』が、ふのづのの神の娘「ふてみみの神」を妻にして『あめのふゆきぬの神』を産み。

『あめのふゆきぬの神』がさしくにおほの神の娘「さしくにわか姫」を妻にして『大国主の命』を産み。

はい、お疲れさまでした。ようやくこれからのお話の主人公、須佐之男から数えて六代目『大国主の命』がお産まれになりました。

ひとりでも知っている神さまがおられたでしょうか？

これから、大国主が、広大な領土を手に入れるまでの大冒険が始まります。高天原の暴れん坊、須佐之男にはしばらくの間お休み願いましょう。

あ、そうそう。須佐之男とくしなだ姫は出雲の佐草にある八重垣神社や埼玉県の氷川神社に二人そろってお祀りされておられます。また須佐之男は、愛知県の津島神社や出雲の熊野大社、そして祇園祭で有名な京都の八坂神社にもお祀りされて、日本中に疫病が蔓延しないように私たちを守っておられます。

この後のお話はまたこの次に。

草那藝之大刀（クサナギノタチ）

ぼくは大蛇のしっぽ
からでてきたよ。

都牟羽の大刀（ツムハノタチ）
とか天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）
とかよばれてるよ!!

第十四話　いなばの白兎

ふることに伝う。
大国主は、ほかにも、
・おおあなむぢ（大穴牟遅）
・あしはらのしこを（葦原色許男）
・やちほこ（八千矛）
・うつしくにたま（宇都志国玉）
という五つの名前で呼ばれておりました。試練をへるごとに、よび名を変えて登場してこられますから覚えていてください。

さて、大国主には、八十人もの兄がいました。兄たちはそれぞれ広い領地を持っていましたが、そのすべての国土を弟の大国主に譲ることになりました。それにはつぎのようなわけがあったのです。

稲葉に八上姫という美しいお姫様がおりました。姫をお嫁さんにしたいと思った兄たちは、結婚を申し込むためにそろって稲葉へと旅立ちました。

おおあなむぢ（大きな穴の中の偉大な人）は、兄たちの荷物を大きな袋に入れて担がされています。そして列の一番うしろを従者のような姿で歩いていました。これがあの有名な、大きな袋を担いだ大国（大黒）さんのお姿なのでございます。

ある日、氣多という海岸を一行がワイワイガヤガヤと通りかかりますと、皮をはがれた赤裸の兎が、

「いたいよ。いたいよ」

と泣いているのに出会いました。兄たちは兎に、

「海水につかり、山の上で風に吹かれておればすぐに良くなる」
そう言って、またガヤガヤと立ち去りました。
これでこの痛みから解放されると思った兎は、さっそく言われたとおりにしました。ところが海水の塩が乾くにつれて皮膚がひび割れ、前よりももっとひどく痛み出したのでございます。
エーン。エーン。エーン。
そこに、遅れてやって来たおおあなむぢが通りかかり、痛々しい兎を見つけて、
「うさぎさん。これはいったいどうしたのだ？」
と声をかけられました。
兎は、今までの自分の身に起ったことを、のこらず話し始めました。
「わたしは隠岐島に住んでいましたが、この地に渡ろうと思っても渡ることができません。そこで、わに鮫をだまして、こんなふうに言ったのです。

『お前たちと、ぼくたちとどっちの数が多いかくらべっこしようじゃないか。だからおまえは仲間を全部集めてここから氣多の岬まで順序よく並ぶんだ。わたしはその上を、数をかぞえながら走って渡ろう。そうすれば、どちらが多いかすぐにわかる』

それでピョンピョン渡り始めたのですが、もう一歩で岸に着くというところで、わたしは、

『うそだよー。とんまの鮫やぁーい。ぼくはこっちに渡りたかっただけだい！』

と言ってしまったのです。それで怒った最後の一匹に捕まって、皮をはがれて赤むけにされてしまいました。あまりに痛くて泣いていたら、先程通りかかった八十人の神々が、

『海水を浴びて風に吹かれていろ』

と言うのでその通りにしたら、前よりもひどくなったのです。エーン、エーン」

この兎いったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。

稲羽素兎（イナバノシロウサギ）

鮫（サメ）に皮（カワ）をはがれて
キズだらけになったんだけど大国主（オオクニヌシ）の言うとおりにガマの穂綿（ホワタ）にくるまったら治（ナオ）ったよ。

第十五話　赤い猪

ふることに伝う。

兎は、わに鮫をだましたために皮をはがれたこと、兄たちの教えた治療によって、傷がよけいにひどくなったことを話し終えました。それを聞いたおおあなむぢは、

「すぐに水門（河口・汽水域）に行き、その水で体を洗いなさい。それから蒲の穂綿（穂黄）を取り、敷き散らしてその上に転がりなさい。そうすればきっと傷も癒えるだろう」

と教えられました。

兎は、すぐにその通りにしました。すると本当にきれいに傷が治ってしまったのです。この治療法は、日本古来の薬草療法（和法）として今も人々に伝えられているのでございます。

これがあの有名な『いなばの白兎』のお話です。じつはこの『いなばの白兎』、兄たちが求婚しに行った八上姫の使いの兎神だったのです。それでこんな予言をおおあなむぢに言いました。

「八十神たちは八上姫を妻にはできないでしょう。袋を背負わされて従者のようですが、あなたが姫を獲得なさるでしょう」

さて、先に稲葉に着いた兄たちは、八上姫に求婚しましたが、

「わたしは、あなたがたの誰とも結婚するつもりはありません。わたしは、おおあなむぢに嫁ぎます」

と冷たく追い返しました。兎の予言どおり八十人全員みごとにふ

られてしまったのです。
　兄たちは、八上姫が「わたしは、おおあなむぢに嫁ぎます」と言った言葉を聞いて「なんであんなやつが！」とかっとなっていました。それで、おおあなむぢを逆恨みして、「あいつさえいなければ八上姫と結婚できるのだ。途中で捕まえて殺してしまおう」という相談をしました。

　一方、おおあなむぢは、大きな袋を背負っているために、ずいぶん遅れて山の麓をふうふういいながら歩いていました。兄たちは、そこへやって来て、
「おおあなむぢよ。この山の上に赤い猪がいる。俺たちがそれを追い下すから、おまえは下で待ち構えて捕まえろ。もし捕まえそこなったらお前を殺すぞ」
　と命じました。素直なおおあなむぢは、言われるままにイノシシが追われてくるのを山のふもとで待っておりました。

そこで、兄たちは猪の形にそっくりの大岩を真っ赤に焼き、

「えいっ」

と力いっぱい山の上から転がり落としたのです。

そんなこととは知らないおおあなむぢは、勢いよく転がってきた焼石をイノシシだと思って全身で受け止めました。

山の中に悲痛な叫び声が響きわたりました。

見るも無残、おおあなむぢは、全身に大やけどを負って死んでしまったのでございます。すぐ側には焼け石が転がっており、まだくすぶった煙が立ち昇っておりました。

兄たちは全員、山の上で躍り上がって喜んでいます。

そのことを知ったおおあなむぢの母の『さしくにわか姫』が、髪をふり乱して高天原に駆け昇り『造化三神』の一人、かむみむすひの神の袖に取りすがって息子の命乞いをされました。

母の必死の願いに心を動かされたかむみむすひの神は、

赤貝の女神『きさがい姫』と
蛤の女神『うむがい姫』
を下界に遣わされ、治療にあたらせました。
きさがい姫は貝の粉をこそいで集め、うむがい姫はその粉を貝汁で溶いて母乳のようにして火傷に塗りました。
すると……、不思議、不思議、おおあなむぢはすぐに息を吹き返し、元氣に歩き回れるようになったのでございます。
やけどの治療には貝汁が、とてもよく効くということでございます。

そうそう言い忘れておりましたが、いなばの白兎は、鳥取県の白兎海岸にある白兎神社のご祭神としてお祀りされています。今も海岸を歩くと、どこからか白うさぎが現れてくるかもわかりませんね。

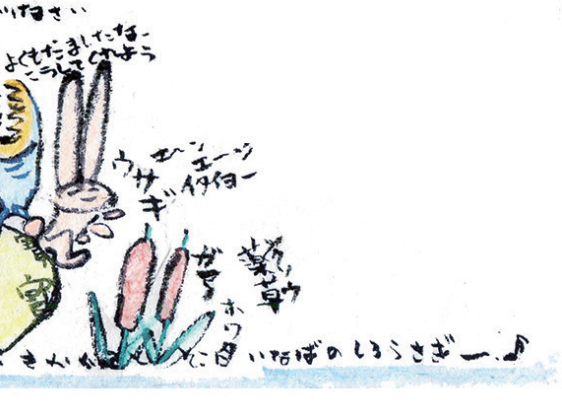
さて、おおあなむぢが生き返ったことを知った兄たちは、またも

やよからぬ相談事をしています。

「あいつをもう一度殺してしまおう」

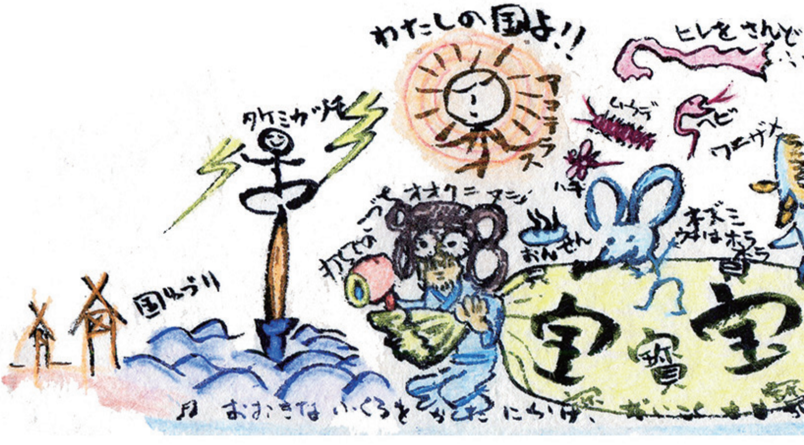
という計画を立てていたのです。

恋のうらみというのは本当に怖いものですね。この後いったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。

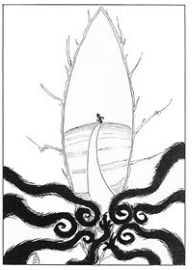


大國主神

いろんなことがあったなぁ〜
皮をむかれた兎を助けたなぁ〜
木にはさまれて死にかけたなぁ〜
焼石を抱いて死にかけたなぁ
蛇蜂百足の洞窟にあぶられたなぁ〜
野火をはなたれて死にかけたなぁ〜
ネズミに助けられたなぁ〜
一生懸命造った国をゆずっ
うばわれたなぁ〜
いろいろあったなぁ〜
もう寝よぉ



第十六話
木の国から根の国へ



ふることに伝う。

赤貝と蛤の女神がやさしく看病してくれたおかげで息を吹き返したおおあなむぢは、すっかり元氣になり、鼻唄を歌いながら、山道を歩いておりました。つい先ほどひどい目にあったということさえ感じさせません。

兄たちは、そのような弟を尻目に、再びおおあなむぢを殺す仕掛けをつくるために先回りして走っていきました。そして、大木を切り倒して道をふさぎ、その木をワニの口のように二つに裂いて、間

にくさびを打ち込みました。

そこへ何も知らないおおあなむぢがやって来ました。兄たちは二手に分れてその仕掛けの向こう側から、手を振って「お〜い、こっちへおいで」とおおあなむぢを呼んでいます。

いちど殺されかけているのに、疑うことを知らないおおあなむぢは、兄たちに追いつこうとして、その木の割れめをくぐろうとしました。

大木の影に隠れていた一方の兄たちは、そのときをねらいすませて「えいっ」とばかりに力一杯くさびを引き抜きました。

ぺっっしゃんこ！

「やったー！」

おおあなむぢは木の間に挟まれて、またまた死んでしまったのです。一度目は焼け石で殺され、二度目は木に挟まれて殺されるとは何と不運なことでしょう。

おおあなむぢの二度目の悲報を知った母のさしくにわか姫は、泣

きながら息子をさがし回られました。そして、木の間に挟まれた無残なおおあなむぢを見つけるやいなや、すぐに、木を裂いて息子を取り出し、こんどは自力でなんとか蘇生させ、

「そなたは、いままで運よく命を吹き返すことができましたが、ここにいたら八十人の兄たちにいつまでも付け狙われ、しまいに殺されることでしょう」

と告げました。

そこで母神は、息子をかくまってもらうために紀（木）の国に住む『おおやびこ』という木の神のところに逃がしました。おおやびこは、いざなぎといざなみが、おのころ嶋でお産みになった神様のひとりです。

執念深い兄たちはこのことを知り、捜し追い、ついに紀の国に隠れているおおあなむぢを見つけだしました。兄たちはそれぞれ矢をつがえ、周囲からせまってきます。

木の神おおやびこは、すぐに、おおあなむぢを『根の国』に通じている木の俣（大木の根元にぽっかりと開いた大きな穴）よりくぐりぬけさせて逃がし、その後ろ姿に向かって、

「須佐之男の命のいらっしゃる根の国に行きなさい！　必ずよいように計ってくれるでしょう！」

と大声で助言されたのでございます。

おおあなむぢはその言葉を背に、根の国（死者の国）へと一目散に駆け出しました。

この木の俣は『おおやびこ』だけにしか見えませんでした。兄たちの目には、今までそこにいたはずのおおあなむぢが、ふいに姿を消したように映りました。

キツネにつままれたような顔をしながらも兄たちは、八十人で手分けして消えたあたりを捜し回りました。

もちろん木の神であるおおやびこも、大きな木に姿を変えていましたので兄たちは見つけることができません。それでとうとうあき

らめて帰っていきました。

このようなわけで、木の神おおやびこは、大難よけや命を守る神（紀の国の祖神）として、和歌山県の伊太祁曽神社に祀られています。今でも、神隠しのように姿を消し去ってしまう大きな木の俣が、紀の国の山深い森のどこかにあるということでございます。不思議なことでございます。

さて、木の俣をくぐり抜けたおおあなむぢは、まるで時空移動でもしたかのように、あっという間に根の国に到着しておりました。根の国に着いたおおあなむぢは、やがて、須佐之男の住む御殿にたどり着き、門をたたきました。

屋敷の中から出てきたのは一人の美しい姫でした。姫の名はすせり姫（須勢理姫）と申されました。このお方は須佐之男の末娘です。

一目見て、すせり姫はおおあなむぢを氣にいってしまいました。

それはおおあなむぢも同じでございました。
活発なすせり姫はすすんでおおあなむぢの手を取り、人目を忍んで『まぐはひ』ました。そして、おおあなむぢを案内して屋敷へと入っていかれました。
「須佐のお父様。たいへん麗しい神がおいでになっております」
対面した須佐之男は、おおあなむぢを見ると、
「この男はわたしの六代目の子孫、
葦原の色許男（あしはらのしこお）だ」
これは大国主の二つ目の名前で、葦原の中つ国から来たカッコいいやつ、という意味でございます。
さてこのお話はまたこの次に。

大屋毘古神

ぼくは、災難にあっていた、
大国主を助けました。
どうやって助けたか
というと、それは
ぼくの体にひみつ
があります。
ぼくの体には大き
な穴洞があって、くぐると
違う国へ行けるんです。
それで大国主はくぐって助かりました
里もよくなりました。いまぼくは
木の国の伊太祁曽神社に住んでいます。
たくさんお参りに来てください。

第十七話
蛇、蜂、ムカデの室

ふることに伝う。

須佐之男は、自分の子孫が根の国まではるばると訪ねて来たことを知り、門の中に招き入れました。しかし、娘のすせり姫が一目ぼれしたことを知ると、婿として適切かどうかを判断するために、たいへん厳しい試練を科されたのでございます。

その夜、須佐之男は、たくさんの蛇が這い回っている窓ひとつない部屋に、しこおを連れていき、

「ここで寝ろ」

と命じました。しこおは、このような言いつけに顔色ひとつ変えず、恐ろしい『蛇の室』へ入っていきました。

それをうかがっていたすせり姫は、心配でなりません。すぐに自分の部屋へと取って返し、あたふたと戻ってきました。そして、須佐之男に聞こえないように、小さな声で、

「蛇がかみつこうとしたら、この布を三度振り、蛇を追い払いなさい」

と蛇の災いを鎮める呪力のある『蛇の布巾』をこっそり授けました。

しこおがそのとおりにいたしますと、不思議なことに蛇は静かになり、おかげでぐっすりと眠ることができたのでございます。

次の夜は、毒の針をもつ『ムカデと蜂の室』に入れられてしまいました。

すせり姫はこんどもこっそりとやって来て、

『ムカデの布巾』と『蜂の布巾』を授けて、

「この布を三度振り、追い払いなさい」
と前と同じことを言いました。そのおかげで二日目もぐっすりと眠ることができ、無事にその部屋からにこにこして出てきたのでございます。

須佐之男は、刺し傷ひとつないしこおの身体を見て「なんとも不思議なやつ」と思っておりましたが、すせり姫がかげで助けているとはつゆ知りません。

そこで須佐之男は、べつの試練を与えてみることにしました。射ると音の出る『鳴鏑（なりかぶら）』の矢を野原の中に放ち、

「あの矢を取ってこい」

と命じたのです。しこおは、まっしぐらに草むらの中へと走って行きました。

須佐之男は、しこおの姿が見えなくなるのを見届けて、回りから火を放ちました。

炎は、風のあおりを受けてまたたく間に草原中に広がっていきま

す。しこおは、逃げ場を求めて走りまわったのですが、すでに炎と煙は辺り一面を覆いつくしていました。

しこおは、その火の海の中で茫然として立ちつくしておりました。

そのとき、足元に一匹の鼠が来て、

「内はほらほら。
外はすぶすぶ。
チュウチュウ」
と鳴きました。

何だろう？

不思議に思って鼠の方に近寄っていくと、ドスンと深いほら穴の中に落ち、尻もちをついてしまったのでございます。そのあいだに、炎は頭上をすぶすぶと通り過ぎていきました。

こうしてしこおは、鼠のおかげで焼け死なずにすんだのです。おまけに、その鼠は捜していた『鳴鏑の矢』も持ってきてくれておりました。矢の羽は鼠の子どもたちがかじっていましたけれど、しこおは大喜びでその矢を受け取りました。

ところで、矢の羽というのは各部族や持つ人によって、それぞれに異なった種類の鳥の羽を使っていましたので、その矢が須佐之男のものかどうか見分けがつかないように、わざと羽をかじったというのが本当のところでしょう。

いやはや、鼠の智恵には感心しますね。

さて、すっかり焼きつくされた野原に、すせり姫はぽつんと一人たって見ていましたが、焼け跡に誰もいないことを知ると、泣きながら葬儀の準備を始めました。

須佐之男も、婿に迎えるための試練と思ってやったことでしたが「あいつも、ここまでか」と思って、焼け野原にでて様子をうかがっています。

いったいどうなるのでしょうか？　このお話はまたこの次に。

須勢理姫

蛇の比礼を三回ふると
ヘビをおっぱらうことが
出来ました

蜂の比礼を三回ふると
ハチをおっぱらうことが
できました。

百足の比礼を三回ふると
ムカデをおっぱらうことが
できました。

第十八話
死者の国からの脱出

ふることに伝う。
死んだと思われたしこおがどうどうと胸を張って、焼け野原の中から、元氣に歩いてくるのが見えました。
すせり姫はすぐに走り寄って、無我夢中で抱きつきました。
しこおは、須佐之男の前にやって来ると、だまって『鳴鏑（なりかぶら）の矢』を差し出しました。
「ほう！」
須佐之男は「なかなかやるやつだ」と感心しましたが口には出し

ません。そこで、三つの試練をりっぱにのりこえたしこおを、ようやく娘の婿として認め、はじめて屋敷の中に招き入れました。

須佐之男は居間にごろりと横になると、しこおを呼びつけ、頭のシラミを取るようにと命じました。

しこおは須佐之男の側に寄りました。

そして、頭のシラミを取ろうとしたのですが、ハッとして伸ばしかけていた手を止めました。須佐之男の頭に這い回っていたのはシラミではなく、氣味の悪いムカデだったのです。

しこおはどうしたものかと躊躇しました。

そこですせり姫は、ムカデの色によく似た赤紫色のむくの木の実と赤土をこっそりと渡しました。しこおはその二つを一緒に口に含んでかみ砕き、べっと吐き出しました。

それを見た須佐之男は、ムカデを食いちぎって吐き出しているのだと勘違いして「たのもしいやつだ」と思いながら、安心してぐっ

すりと寝込んでしまいました。

しこおは、いまが逃げるチャンスだと思い、須佐之男の髪の毛をいくつかに束ねて、たる木にくくりつけました。そして五百人がかりでないと動かせない大岩で部屋の入口を塞ぎ、須佐之男が大切にしている根の国の宝物『生大刀』『生弓矢』『天の沼琴』を奪い、すせり姫を背負って逃げ出しました。

ところが、二人はとても慌てていたので、天の沼琴が木に触れてしまい大音響が鳴り響いたのです。

驚いた須佐之男は目を覚まし、がばっと跳ね起きました。瞬間、髪の毛に結ばれていたたる木が折れ、寝ていた部屋がぶっ潰れてしまいました。須佐之男はその壊れた部屋の中で髪の毛をもたもたとほどいています。

その間に、二人は一目散に逃げました。やっとのことで髪の毛をほどき終った須佐之男は後を追い始めました。しかしそのときには

すでに遅く、二人はこの世とあの世の境である、黄泉つひら坂に来ておりました。

そして、須佐之男が黄泉つひら坂にたどり着いたときには、二人は遥か彼方に小さな姿を残すだけとなっておりました。

須佐之男は、遠くの二人に向かって大声で叫ばれました。

「その生大刀と生弓矢で、お前の兄たちを山の麓や川の瀬に追いやってしまえ！

お前は『うつしくにたま（現実世界の王者）』と名のり、この世の王となれ！

わが娘、すせり姫を正妻にして、大国主（おおくにぬし）として国土を治めよ！

宇迦の山の麓にりっぱな宮殿を建てるんだ！

高天原の神との約束の印である千木（神社の社殿の屋根の上にある交差させた長い木材）を掲げるのを忘れるなよ！

こいつめ！」

そこで、中つ国にもどったしこおは、すせり姫を正妻にし、須佐之男のいいつけ通り生大刀と生弓矢で八十人の兄たちを追っ払い、領土を広げ、少しずつ国としての形態を整え、大きな国を作ってゆかれました。

このときについた名が大国主なのでございます。

さて、例の八上姫ですが、約束通り稲葉から呼び寄せて結婚されたのですが、正妻のすせり姫の執ような嫌がらせに恐々として、自分の産んだ子を木の股に挟んで実家へ逃げ帰ってしまわれました。

いつの世も女の争いは恐ろしいものでございます。

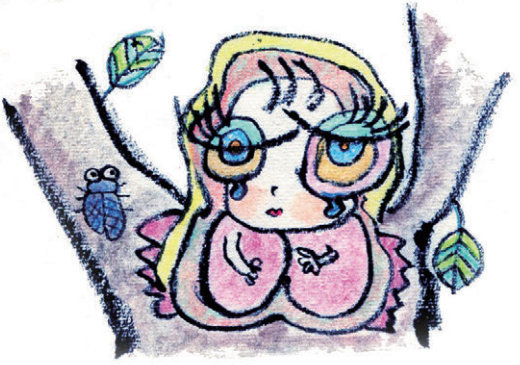
ところで木の股にはさまれて取り残された八上姫の子どもですが、ご神木などの木の股に宿る木俣神（きまたのかみ）、またの名を

御井神（みいのかみ）とも呼ばれるようになったとのことでございます。

さてこの後のお話はまたこの次に。

木俣神

ここに居ると元気になるのよ　と母はそう言ってどこかに行ってしまいました。私の涙は泉になりました。だから御井神とも言います。



第十九話
すせり姫の嫉妬

ふることに伝う。

葦原の色許男は、須佐之男にいわれたとおり、大国主と名のって次々と国土を広げておりました。

そして、地方の土地を手に入れる度に、その国の美しい娘を妻として迎えるので、正妻で氣の強いすせり姫は面白くありません。稲葉の八上姫は上手く追い払ったのですが、大国主の浮氣の虫は少しもおさまりません。

あるとき、大国主は、高志の国（北陸）に若くて美しい沼河姫が

いるとのうわさを聞いて、はるばる訪ねて行かれました。

そして、八十人の兄たちを、生大刀、生弓矢で追っ払ったときについた英雄としての名前、八千矛（やちほこ）と名のり、独身の寂しい身だと偽って、長い長い恋文を書かれたのでございます。最初に姫の家に行ったときは、寝室の前で戸をたたいて歌を捧げても、顔もみせてはくださいませんでしたが、二日目の夜には心を開き、部屋へ招き入れてまぐあわれたのでございます。

それを知った、すせり姫のしっとはたいへんなものでした。あまりのヒステリーに困り、大国主は妻から逃げ出そうとして、出雲から大和の国（奈良県）へと脱出計画をたてました。

その支度を整えて、馬の鞍に片足をかけながら、妻にこんな歌を捧げました。

『わたしは　黒や青の衣を着て

まじめくさった僧や役人のふりをして
家の中にじっとしているのは
似合わないんだよ
わたしには　山の草や木で染めた戦の色
赤が一番似合っているんだよ
まったく自分でもほれぼれするよ
さあ　これから
領土を広げる戦いに出かけるよ
きっと　わたしが出かけたあとで
しょんぼりするんだろうね
わたしの奥さん』

そこで、すせり姫は、美味しいお酒をなみなみと注いだ杯を大国主に差し出しながら、こう歌いました。

『いさましい八千矛の神よ
わたしの大国主さまよ
あなたこそ男の中の男です
領土を広げて行く先々で
若い妻をもたれるのでしょう
でも　わたしは女の身ですので
あなた以外に夫はないのです
まあ　お酒でも召し上がって
ふわふわで
やわらかな絹のおふとんの中で
あわ雪のような
わたしの胸や腕をたっぷりと
なでさすってください』

と……まあ……このように夫を色じかけで自分のもとに引き止め

てしまわれたのでございます。

というようなわけで、大国主は大和に行くのをとりやめて、お二人は今もおそろいで出雲の地（出雲大社）に仲良く鎮まっておられるということでございます。

……と言いましても、すでにこのときまでに、白状されただけでも、宗像三女神の長女の多紀理姫、神屋楯姫、鳥取姫、八上姫、沼河姫と五名の女性たちと『まぐはひ』されていたのです。ましてや子どもに至っては、一八一人もいたということでございます。

多紀理姫との間にできた子供、阿遅鉏高日子根の神と下照姫。神屋楯姫との間にできた子供、事代主などがこの後のお話で活躍されます。

大国主は、まさしく「英雄、色を好む」を地でゆかれたような方で、今も『福の神・大国さま』として、日本中の皆さまに慕われ愛されておられるのでございます。

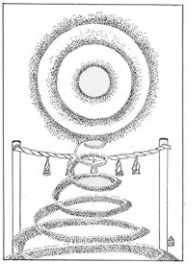
ところで、歌をうたい合って恋心を語るのを『神語り』というのですが、歌がうまくないと女心もつかめませんでした。その風習は、若い男女が歌を交換して恋を語り合う『歌垣』としてのちの世に伝わり、やがて、万葉集や平安朝の歌人が活躍し、日本は「歌の国」といわれるほどに文化が花開いていったのでございます。

さて、内輪話はこれぐらいにして、この後のお話はまたこの次に。

少名毘古那神

ぼくは鵝の羽の衣を着ています。
背丈は親指ぐらいです。
薬草の調合と酒造り、
それから温泉堀りや石の加工
などが得意です。
大国主の手助けを
するために、
天乃羅摩船という小さな舟に
乗って出雲の美保崎に
やって来たよ。

第二十話
光る船に乗ってきた小さな神



ふることに伝う。

ある日、大国主は、たくさんのお供を連れて出雲の美保の岬を散歩しておりました。すると、沖の方から鏡のようにきらきら輝く小舟が近づいて来たのです。よく見ると、手のひらほどの舟の上に、蛾の皮をまとった、親指ぐらいの小さな神が乗っています。

「だれかなっ?」と思って、大国主は名をたずねたのですが、小さな神は答えようとしません。お供の者にも聞いたのですが誰も知りません。そのとき、

「久延毘古が知っている、グクッ、グフッ」
とひき蛙の『たにぐく』が鳴きました。
『くえびこ』とは、田んぼの中に一本足で立っている山田の案山子のことです。朝から晩までずっと考えごとをしているので、何でもよく知っています。さっそく、従者がくえびこを担いで来ました。
『くえびこ』は、雨や風にさらされてぼろぼろで、悪臭を放っています。
「船の名は『天のかがみ船』。乗りたる人は、かむみむすひの神の子、少名彦那の神でございます」
くえびこは小さな神を一目見るなり答えました。
高天原のかむみむすひの神にたずねると、
「間違いなくわたしの子だ。あまり小さいので指の間よりこぼれ落ちたのだ。おまえは大国主と兄弟のように助け合って、この中つ国をしっかりと発展させていきなさい」

とにこにこ笑って命じられたのです。
以来、二人はなかよく協力して、国造りに精を出しました。
東に、よく日の当たる土地があると聞けば、
行って、農業技術の指導をしました。
西に、住むところに適しているところがあると聞けば、
行って、宅地を造りました。
南に、常世からの湧水が出ていると聞けば、
行って、温泉（道後温泉）を堀り憩いの場を作りました。
北に、病氣で困っている人があると聞けば、
行って、病氣を治す薬である薬酒を調合してあげました。

ところが、中つ国が、豊かに発展していく基礎プランが完成し、
国土開発計画が順調に進み出したとたん、
「じゃあ、あとは頼むよ。僕は本当は薬の方が専門なんだ、もっと
勉強しようと思うから国に帰るよ。ごめんね」

と言って、少名彦那は、ぺこんと小さな頭をさげると、するすると粟の葉っぱに登り、粟の穂先からピョンと飛んで、海のかなたの常世の国へと帰ってしまったのです。

この少名彦那が、一寸法師のお話の元祖だといわれております。

さあ、大国主は大弱りです。広い国土には、まだ発展途上のところが多く残っています。

「ああ、どうしよう。こまった、こまった」とウロウロしては、腕組みして「だれか力を貸してくれないかなぁー」

と嘆いておられました。そのとき、

「わたしの神霊を祀れば、国造りに力を貸そう。さもなくば国造りはうまくいかぬぞ」

という声が聞こえてきたのです。

振り返ると、まばゆい光りに包まれ、海の上を歩いて近寄ってくる神がおりました。その白光はあまりにも強く、とても目を開けて

いられる状態ではありません。大国主は、ただびっくりして何も答えることができませんでした。すると光の中からもういちど声が聞こえました。

「わたしを大切に祀れ。そうすれば助けてやろう」

大国主は、どうしても助けが必要だったので、

「どのようにお祀りすればいいのでしょう？」

と問われました。するとその光る神は、

「大和の青々とした三輪山の頂上にわたしを祀り、身を清めてお仕えせよ」

と答えられたのです。この神は大物主の神で、今も人々から「みいさん（蛇）、みいさん（蛇）」と親しまれ、大和の国（奈良県）の大神神社に鎮まっておられます。

神社の背後にある三輪山の山頂には、古代信仰の祀り場である石座があり、山そのものをご神体（神奈備山）として大切にお祀りしているのです。三輪の山がときどき光るとうわさされるのは、こ

ういうわけがあるからでございます。

さて、大国主は、言われたとおりに光る神大物主を三輪山に祀ると、中つ国はみるみるうちに栄え、水は豊かに湧き、葦が生い茂り、稲はたわわに実り、豊作が続いたのでございます。このすばらしい風土を称え、中つ国（日本）は、

『豊葦原之千秋長五百秋之水穂国』とも呼ばれました。

ここまではめでたしめでたしでございました。

しかし、高天原に住む天照大御神が、

「豊葦原の水穂の国は、我が子『正勝吾勝々速日天忍穂耳』が統治すべき国である」

と突然こんなことを宣言されたのです。

さて、いったいどうなるのでしょう。このお話はまたこの次に。

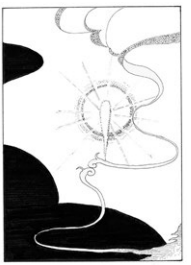
多通具久

ぼくは ひきガエルの
谷ぐくです。よくしゃべります。
水をくぐったり、谷をくぐったり
して遊んでいます。
おお国主の
お供をしています。
ぼくは毒を持っています
さわらないでね。
あと、宮沢山子の『くえびこと友達』です。

第二十一話　高天原からの使者

ふることに伝う。

「豊葦原の水穂の国（美しい日本の国）は天つ神であるわたしの息子が治めるべき国です！」と宣言した天照大御神は、さっそくあめのおしほみみ（天忍穂耳）を、高天原から下界へと送り出しました。



おしほみみは『天の安の河』で天照大御神と須佐之男が『うけひ』したときに、天照大御神の左の髪飾りから産まれた長男です。

「では行ってまいります」
おしほみみは、はりきって出かけていきました。しかし、だんだんと心細くなってきたのでしょう、ちょっと天の浮橋に立ち寄って下界のようすをうかがっておりました。
「おやっ？　何かへんだぞ」
ざわざわと騒々しい物音が聞こえてきます。不安になったおしほみみは、下界に行くのを急きょ取りやめてもどってきました。そして、天照大御神に、
「わたしがくるのを喜んでいない国つ神がさわいでいるようです」
と報告したのでございます。
息子の報告をうけた天照大御神とたかみむすひの神は、天の安の河原に八百万の神々を集めて高天原会議を開くことにしました。
このように、高天原では、ことあるごとに皆に呼びかけて全体会議を開きます。神々は昔からとても民主的だったのでございます。

さて、天照大御神は、八百万の神々をゆっくりと見渡しながら声を大にしてたずねました。

「葦原の中つ国は、わたしが、父いざなぎの命からおあづかりした国です。しかしそのことをよく思わない、国つ神たちがうるさく騒いでいるようです。そこで、反対している神々をなんとか服従させたいのですが、誰を使者に送れば良いでしょうか？」

会場がざわざわと揺れ動きます。しばらくして、

「おしほみみの弟、天の菩卑の神を使わせましょう。かれなら人あたりよく、まず争いなく無事に役目を果たすと存じます」

高天原一の知恵者でたかみむすひの神の子、思金の神の発言です。

会場がしんと静まり返ります。

しばらくして賛成の拍手が方々から沸き上がりました。満場一致で決まりです。

そんなわけで、まず天照大御神の次男、天のほひが下界へと降っていかれたのです。ところが、天のほひは、中つ国がとても居心地が良かったので、結婚し家庭を持って住み着いてしまったのです。それで、三年たっても何の連絡もしてきません。

そこで、またもや高天原会議がひらかれました。

「天のほひは、どうやら大国主に懐柔されて、国つ神の味方になってしまったようです。つぎはだれを使者に送ればいいでしょう?」

天照大御神は皆を見渡したずねました。

「それでは高天原一の美男子、天のわかひこ（若日子）をやりましょう。彼なら武道にも長けており、すでに妻子や家族もここにあるので、まず間違いありますまい」

思金の神が提案しました。そして誰の反対もなくすんなりと決議されました。

そこで天照大御神はわかひこに、狙ったものは必ず外すことのない『マカコ弓』と大蛇でも簡単に殺せる『ハハ矢』をお与えになっ

て下界へと送られたのです。

ところが、わかひこは、大国主の娘で天上界にも比べるものがいないほどの美人、したてる姫（下照姫）と結婚されて、後々は自分が中つ国の王になろうと考えたのでした。それで、八年が過ぎても何の報告もしてきません。

そんなこんなで、またもや高天原会議が開かれました。

「わかひこが何も言ってきません。誰をやればその理由を問いただすことができるでしょう？」

天照大御神は少しイライラしながら、集まった神々に問われたのです。その瞬間、思金の神と八百万の神々は口をそろえて叫びました。

「キジの鳴女をやりましょう！」

さて、『キジの鳴女』とはいったいどんな女なのでしょう。このお話はまたこの次に。

天甘音比神（アメノホヒノカミ）

ぼくの母（カア）さんは
あまてらすすめ
ゆいます。

ぼくは母（カア）さんの
右の耳（ミギミミ）の髪飾（カミカザ）りの勾玉（マガタマ）から生（ウ）まれたよ！
五人兄弟（ゴニンキョウダイ）の次男（ジナン）です。

『母さんが あの国は 私のくにだから返してもらってきなさい!!』

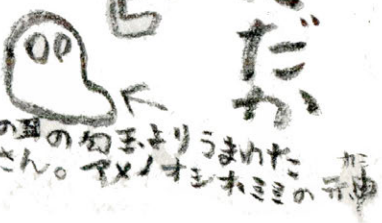
とゆうので

出雲の国へ行って大国主と

お話ししてたら良い人だった

ので、そこに住むことにしました。

すごいりっぱな家も造ってもらいました。



第二十二話
キジの鳴女

ふることに伝う。

下界に降りたまま八年間なんの報告もしてこないわかひこのもとへ、キジの鳴女を送ることが決まりました。そこで、天照大御神はキジの鳴女を呼び、

「わかひこのところへ行って、

『凶暴な国つ神どもを服従させよと命じてあるのに、八年もの間いったい何をしているのか』

その理由を問いただしてきなさい」

と命じて、使者に出されました。

キジの鳴女はさっそく下界へ飛び、わかひこの屋敷の桂の樹の枝に止まりました。

「ワカヒココヒカワ。カノルイテシヲニナナニヲシテイルノカ？ケーン、ケーン」

とキジの鳴女はかん高く鳴き、天照大御神の言葉を、かくかくしかじかとつぶさに告げたのでございます。

わかひこはキジの言葉は理解できませんが、心をさぐることのできる霊能の強い女『あめのさぐ女』がそばで聞いており、

「この鳥の鳴き声は不吉です。射殺してしまいなさい」

とわかひこの耳にささやいたのです。

わかひこはすぐにマカコ弓をビュンと引きました。矢はキジの鳴女の体を見事につらぬき、そのまま高天原まで、一直線に上がっていきました。

その頃、高天原では、天照大御神と高木の神（高皇産巣日の神）が、キジの鳴女の報告を待っていました。その目の前に矢が突き立ちました。

高木の神は、矢に血がついているのを見つけ、

「この矢は、わかひこに授けたハハ矢である」

と一同の神々に見せ

「もしも、わかひこがわたしたちに忠実で、この矢を悪い神に向けて射たのならわかひこに当たるな！　もし謀反の心があるのならわかひこに当たれ！」

と言って、飛んできたときに開いた穴から下界めがけて突き返したのです。

矢は、明け方に流れ星のように猛スピードで落ちてきて、寝ていたわかひこの胸板にぐさりと深く突き刺さりました。

『敵が射た矢を射返すと必ず当たる』という還り矢の言い伝えはこのことから始まったということでございます。

それともう一つ、行ったきりで帰ってこないということを『きじの片使い』と言います。

さて、愛しい夫の突然の死に、妻のしたてる姫は号泣していました。泣き声は風と共に鳴き響いて、高天原に残していたわかひこの父や妻や子どもたちにまで届きました。そして皆下界に降りてきて、したてる姫と一緒になってさめざめと泣いたのです。

葬儀の準備が始められました。まず、死体を安置する喪屋が作られました。そして、

『翡翠』の姿に変じて、死者のお供えを作る役、

『雁』の姿に変じて、食べ物を盛った器を、うなだれて運ぶ役、

『鷺』の姿に変じて、ほうきを持って魂を掃き寄せる役、

『雀』の姿に変じて、臼で米をつく役、

『雉』の姿に変じて、泣き女をする役、

それぞれが与えられた役を演じて、八日八夜のあいだ大宴会を開いて遊び興じました。

こうすると、死者の霊魂が還ってくると信じられていたのですが、しかし鳥の姿に変装して遊び回るとは、何とも変わった葬儀でございます。

さてこのつづきはまたこの次に。

天佐見売（アメノサグメ）

名前のとおり 神意（シンイ）や人のこころを探（サグ）るのがとくいな巫女（ミコ）です。天若日子（アメワカヒコ）のやしきで働（ハタラ）いていました。

ある時（トキ）やしきの庭（ニワ）の村（カツラ）の木（キ）の枝（エダ）に雉（キジ）が止（トマ）りさかんに鳴（ナ）きました。不吉（フキツ）な声（コエ）

だったので若日子にその
ことを伝えました。
若日子は弓矢で雉を射殺しました。
矢は雉をつき抜けて空高く上が
り、また戻ってきて若日子に
ささりました。若日子は亡くなりま
した。

第二十三話　空とぶ船

ふることに伝う。

『雁』『鷺』『翡翠』『雀』『雉』の姿で泣いたり笑ったりして遊ぶ、奇妙な葬儀が八日間つづいています。そこへ、したてる姫の兄、あぢすきたかひこね（阿遅鉏高日子根）がとむらいにやって来ました。その顔、形は、死んだわかひこにうりふたつでございました。

わかひこが生き返った、と勘違いした高天原の妻と父は、

「あなた！」

「おお！　息子が生き返った！」

と叫び、あまりの嬉しさに、たかひこねの足に取りすがったのです。驚いたのはたかひこねです。

「いったいどういうことだ！　親友だからとむらいに来たのだ。それを、けがれた死人と間違えるなんて！」

とひどく腹をたてました。

もともと怒りっぽい性質だったのでしょうか、カッ、となったたかひこねは、鋭い剣を振り回して葬儀のために建てた喪屋を切り倒し、足で蹴飛ばし、ぷいとどこかへいってしまわれました。喪屋はひゅーんと美濃の国（岐阜県）まで飛んでいって、喪山という山になったそうでございます。

葬儀会場はもうめちゃくちゃです。

「あれはわかひこじゃなかったのか？」

「だれなんだ？」

突然のできごとに、皆は唖然としておりました。

それで、妹のしたてる姫が、誤解のないようにと、たかひこねの名前を歌によってあきらかにしました。その声は玉を転がすようなすずしい音色でした。

あめなるや　おとたなばたの
うながせる　たまのみすまる
みすまるに　あなたまはや
みたに　ふたわたらす
あぢすきたかひこねのかみぞ

天上の　織姫たちの首飾り
その美しき　穴玉は
二つの　谷をつらぬきて
強く輝く雷神の
阿遅鉏高日子根の神ですよ

とこんな風に、その正体が玉と同じように光り輝いている強く大きな龍神で、雷神なのですと知らせました。この歌がひなぶり（夷振）で民謡の初まりとなりました。

たかひこねの神は迦毛の大御神とも呼ばれており、大国主と須佐之男の長女のたぎり姫の間に生まれた長男です。この神は大和（奈良県）の葛城の高鴨神社に祀られております。

さて、天のほひ、天のわかひこ、キジの鳴女、と送った高天原の使者たちはことごとく失敗です。天照大御神は、またまた高天原会議を開かれ、

「こんどはどの神を遣わせば良いでしょう」

といささか氣落ち氣味にたずねられたのでございます。思金の神と八百万の神々は慎重に相談をし、やっとひとつの意見がまとまりました。

「こんどは武力をもって当たらせましょう。そこで、天の安の河上の岩屋にいる剣の神、いつのおははりが適任と思われます。もしくはこの神の子どもである、たけみか雷を遣わしましょう。彼ならまず間違いありますまい。しかし、いつのおははりは、天の安の河の水をせき止めておりますので、だれもそこに行くことができません。それで、天のかぐ（光の神）を使いに行かせましょう」

言い終わった瞬間に、もう天のかぐは使いにたち「息子のたけみか雷に行かせましょう」という返事をもらって帰ってきておりました。

そこで、天照大御神は、空を自由自在に飛べる『天の鳥船』を添えて、たけみか雷を下界へと送りました。

こんどはうまくいくでしょうか。このお話はまたこの次に。

鳥之石楠船神（トリノイワクスフネノカミ）

ぼくは岩（イワ）で出来（デキ）ています。

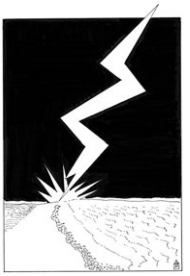
神（カミ）さまが天上界（テンジョウカイ）と下界（ゲカイ）への移動（イドウ）に

便うので大変
いそがしいです。
けど楽しいです。
雷の神さまも連れました。
饒速日の命も連れました。
今日も大空を翔けています。

第二十四話　国ゆずり

ふることに伝う。

バリバリッと耳をつんざくような雷鳴がとどろいて、たけみか雷と天の鳥船が、天つ神の最後の使者として、出雲の稲佐浜に降ってきました。



「なにごとか！」

大国主はびっくりして浜にとびだしてきました。

見ると、剣を逆さまにして波の上に立て、切っ先の上にあぐらをかいて座り込んだ、たけみか雷がおりました。目をぎらぎらさせて、

大国主をにらんでいます。そして、

「おい、大国主。おまえが治めている中つ国は、天照大御神の御子が統治することに決まった。いますぐ国を譲れ！」

と大声でつめよりました。声は雷のようにビリビリと中つ国中に響きわたります。

あまりにもぶしつけな言葉に、大国主は驚いたのですが、へいぜんとした顔で答えました。

「わたしの国は、とうの昔に戦もやんで、いまではのどかに歌で治まっている国です。今さら刃物では争いたくもありません。どうしても国が欲しいというのなら、息子の事代主（えびすさん）に答えさせましょう。しかし今は残念ながら、鳥を追ったり美保の岬で鯛釣りをして遊んでいるのでここにはおりません」

それを聞くと、天の鳥船がすぐに飛んでいき、事代主を連れてきました。事代主はたいへんおだやかな性格なので、

「この国を譲れ！」

と脅されると、

「いいですよ。天つ神に差し上げますよ」

とおとなしく引き下がったのです。そして、たけみか雷に見えないように体のうしろで手を打って呪いをかけ、船から海へと飛び込み、海草の茂る中へもぐり込んでしまわれました。

この事代主神は出雲の国（島根県）の美保神社にお祀りされております。また神戸の長田神社、西宮神社、大阪の今宮戎神社などにも祀られ、えびすさんとして人々に広く親しまれています。

さて、海に消えた事代主を見とどけた、たけみか雷は、よゆうで笑っています。

「わはは。事代主は降参したぞ。ほかに、俺にたてつくようなやつはいるか」

「もう一人の息子、たけみなかたがおとなしくは引き下がらないでしょう」

この問答をしているうちに、たけみなかたが、五百人がかりでないと動かすことのできない大岩を、軽々とかついでのしのしとやってきました。

「だれだ。こそこそと話をしているのは。なに？　中つ国をもらいに来ただと。そんなことは俺と力比べをしてから言え！」

と言うやいなや担いでいた大岩を放り投げ、たけみか雷に戦いを仕掛けたのでございます。

たけみなかたが、むんずと敵の腕を握ったかと思うと、その手は不思議にも氷に変わっていました。おやっ？　と思って引っ込めると、またもとの腕にもどっています。

ふたたび握ると、こんどは切れ味のいい剣に変わっており、それをつかんでしまったのです。慌てて手を離すと、これはあなどれないと思ったのか後ずさりを始めました。

たけみか雷は、

「こんどは俺の番だ！」

と大声で叫え、若芽でも摘むようにいとも簡単に、たけみなかたをぶんと遠くへ投げ飛ばしてしまいました。

力は互角だったのですが、技においては、たけみか雷の方が一枚上手でした。そして、逃げていくたけみなかたを、信濃の国（長野県）の諏訪湖まで追いつめ、殺してしまおうとしました。たけみなかたは、脅えながら命ごいをしました。

「どうか殺さないでくれ。この諏訪の土地から一歩も出ないと約束する。父の命令に従う。兄、事代主の言うことも聞く。天つ神の御子がこの国を望むなら差し上げる」

ところで、たけみか雷との戦には負けたたけみなかたですが、諏訪では狩猟と農耕の大明神として、上社と下社に祀られています。

また諏訪神社では、七年に一度、樹齢数百年の神木を切り出し、その丸太の上に男たちが競い合って上り、坂の上からすべり降りる

勇壮な奇祭、『御柱祭』がたいへん有名でございます。

この『御柱祭』は、山の神が巨木とともに里に下り、人々が神と出会うという祭りなのです。

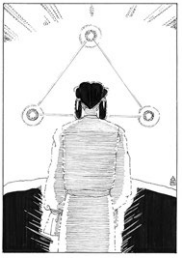
一方、争いに勝ったたけみか雷は、茨城県の鹿島神宮に武道の神、軍神として祀られています。また一説には、千葉県の香取神宮のご祭神（経津主神）も、たけみか雷と一緒に天降り、大国主に国譲りを迫って活躍したと伝えられております。

さて、国譲りはどうなっていくのでしょうか。そのお話はまたこの次に。

事代主神

お父さんは大国主です
お母さんは神屋楯比売です
ぼくは神さまの言葉を聞くことができます
あまてらすの使いの者が来て、国をゆずれと言っているが、どうだろうかと父がぼくに聞くので
神さまにたずねました。
ゆずれと言ってるよと伝えました。
魚つりが大好きです。
えべっさんと呼ばれます

第二十五話　天孫降臨



ふることに伝う。

戦に負けたたけみなかたは、天つ神に国をゆずることを誓い、お母さんの沼河姫の住む諏訪に閉じこもってしまいました。たけみかづちは、得意顔で出雲にもどってくると、大国主に、

「おまえの子どもたちは、天照大御神のおおせに従うと約束した。おまえの返事は」

と威圧的に聞いてきました。大国主は、もともと心がおおらかなので、

「子どもたちの申すとおり、この葦原の中つ国は、おゆずりしましょう。そのかわり、わたしに、天照大御神が住んでいるようなりっぱな宮殿を造ってください。そして、天つ神の子孫が栄えていくのと同じように、わたしの子孫も絶えることのないようにしてください。その約束の印である『神の火』を燃やし続けてください。そうしてくださるなら、すみやかに隠居いたします。わたしの子である百八十の神々は、事代主に仕えていますので天つ神にそむくことはないでしょう」

このように、非暴力主義をつらぬいた大国主のおかげで全面戦争にならずに少しの小競り合いだけで国ゆずりに無事決着がついたのです。

たけみか雷の神が、大国主の願いを天照大御神に伝えますと、快くゆるされたので、さっそく出雲のたぎしというところに大国主のために宮殿（出雲大社）を造られました。

出雲大社は大社造りと呼ばれるりっぱな建物で、太くて大きなしめ縄が目を引きます。昔この社殿は高さが一六丈（四八m）もある、雲を突くような高層建築だったのでございます。

さて、新しい宮殿の前ではお祝いの宴がもよおされています。水門の神の子孫、くし八玉の神が料理をつくり並べました。それが終わりますと、こんどは鵜に化けて海底の粘土を取り、祭式に使う皿を作りました。

つぎに、ワカメの茎を刈って火きり臼を作り、ホンダワラの茎を刈って火きり杵を作り、聖なる『神の火』を起こし、そして、良い言霊のたくさん入っためでたい祝詞を唱えて大国主を祝福されました。

天つ神たちは大国主の子孫や文化を打ち壊してしまわずに大切に保存し、国つ神たちの伝統や習慣も伝えていきました。

こんな風にして大国主が治めていた中つ国は、天つ神が治めるこ

とになりました。
これが後世に伝わる国ゆずりのお話でございます。

天照大御神は、国ゆずりが無事に終わったことをたいそう喜び、もう一度我が子おしほみみを呼んで命じました。
「いま中つ国を平定したと報告があった。すぐにくだって豊葦原の水穂の国をおさめなさい」
ところが、おしほみみの命が下界にいく準備をしていたとき、思金の神の妹の、たくはたちぢ姫（栲幡千々姫）との間にちょうど二柱の子供が生まれました。天照国照彦火明の命（にぎはやひの命）と日子番能邇邇芸の命（ににぎの命）です。
「新しく生まれた下の子、ににぎの命を行かせようと思いますがいかがでしょうか」
「それは名案！　新生の若々しい子を天降らすことは、たいへん縁起のいいことです」

天照大御神は、すぐに、ににぎの命を呼び、

「ににぎの命、そなたに豊葦原の水穂の国をおさめることを申しつける」

とあらためて命じられました。

このような次第で、孫のひこほのににぎの命が天降ることとなりました。

ににぎとは、太陽の恵みを受けて稲穂がにぎにぎしく豊かにみのるという意味の名前でございます。

また、ににぎの命はこの時まだ生まれたばかりの赤ん坊だったので、ふわふわの絹と麻の二種類のお布団（真床覆衾）に包まれていたということでございます。今も、大嘗祭では、真床覆衾を真似てこの時の様子を再現する秘儀が伝わっています。

また一説によると、兄のにぎはやひの命は、十種の神宝を携えて大和の国の哮ケ峰に天降られたというお話も伝わっています。

さて、このお話はまたこの次に。

天火明命（アメノホアカリノミコト）

天照国照彦火明櫛玉（アマテルクニテルヒコホアカリクシタマ）
饒速日命（ニギハヤヒノミコト）というのが正式（セイシキ）
な名前（ナマエ）です
みんな「ほあかり」とか

『にぎはやひ』とか言います
死者をも甦らせる呪力のある
『十種神寶』というお札を持って
高天原から天磐船に乗って
天降って来たよ。

第二十六話
猿田彦とあめのうず女

ふることに伝う。

ににぎの命は天界から天降っていく道中で、不思議な神に出会いました。そこは『やちまた』といって、いくつもの道に分かれたところです。

その道の真ん中で、通せんぼをするように、輝き光る大男が立っていたのでございます。この、正体不明の大男の体から発する光は、上は天界を、下は下界のすみずみまで明るく照らしています。背丈は見上げるほどもあり、鼻が非常に長く、目は赤くらんらん

と輝き、見るからに異様な雰囲氣がただよっています。
天照大御神と高木の神は不審に思い、
「正体を確かめてくるように」
とあめのうずめの命を派遣しました。あめのうずめは、とても女らしくて色っぽいのですが、芯がしっかりして勝ち氣な神です。自分よりも数倍もある大男の前に立ち、斜に構えて豊かな胸をあらわに腕組みし「ふん！」とにらみつけました。
すると大男は、あわてて正座し、
「わたしは国つ神、猿田彦です。天孫ににぎの命が天降られると聞きましたので、道案内をしようと思い、おむかえに参りました」
とていねいに頭をさげて答えました。
天照大御神はたいそう喜び、猿田彦をににぎの命の先導としてつけくわえました。
このようなわけで猿田彦は、道案内の神、道祖神となり、また、祭りの神輿の先導役をつとめて、天狗の格好で現れるようになった

のでございます。

ほかに、ににぎの命につき従う神は、岩戸開きのときに活躍した、あめのこやねの命、ふとだまの命、あめのうずめの命、鏡作りのいしこりどめの命、玉造のたまのおやの命、の神事をつかさどる五神。そして、思金の神、手力男の神。

さらに、穀物の神、とようけ（登由氣）。門を守る神、いはとわけ（石戸別。別名櫛石窓）たちです。

そして、天照大御神は皇位継承の印である三種の神器をににぎの命におわたしになりました。

岩戸開きのときに使った

『八尺の勾玉』

『八咫の鏡』。

八俣のおろちを退治したときに尾から出てきた

『草なぎの劔』でございます。

それらを手渡すときに、

「これからは、この鏡をわたしだと思ってたいせつに祀りなさい。思金の神は、ににぎの命の知恵となって政治の手助けをなさい」と命じ、従者一人一人にも「たのみましたよ」という目を向けられたのです。

この鏡は、いまも伊勢の内宮、五十鈴の宮に大切に祀られております。

こうしてすべての準備が整って、ににぎの命の、

「出発！」

という合図と共に、神々は高天原の石座を離れて、八重にたなびく雲をかき分けて、一路下界へと、にぎやかに進んでいかれたのでございます。

下界へ降りる道中は、ににぎの命にとっては始めて見るものばかりでした。

「この白いものは海月か？」

「いえいえ、星雲でございます」
「このふしぎなものは何か？」
「天の浮橋でございます」
「おっ、このぷかぷかしたものは？」
「浮き島でございます」
ににぎの命はこの浮き島に夕日を浴びてお立ちになられました。その姿があまりにもりりしいので、神々は感動のあまり、
「おおっ！」
と深いため息をもらしました。

さて、一行はいよいよ中つ国に到着し、九州は宮崎県の高千穂の久士布流岳に降りられました。
そこには、刀や弓矢で武装した、あめのおしひの命、あまつくめの命が待っており、ここからはこの二人が先導することになりました。

しばらく歩かれて、くしふる岳の頂上に着いたににぎの命は、遠くを眺めて、

「ここからは韓国岳が見晴らせ、薩摩の国（鹿児島）の笠沙の岬にも近い。朝日はまばゆく、夕日もたいへん素晴らしい。ここは山の幸海の幸に恵まれた本当に吉き地だ」

と喜んでここにりっぱな宮殿を建てられたのでございます。

さて、この後のににぎの命のご活躍はいかに。このお話はまたこの次に。

猿田毘古神

ぼくは大男です。
身長が十二・六メートルあります。
鼻が二メートルあります。
目が真っ赤です。
天宇受売が
好きです。
道案内が仕事です。

第二十七話
木花之佐久夜姫と石長姫

ふることに伝う。

高千穂の峰に天降り、宮殿を建てたににぎの命は、月日がたつにつれて貫禄がついてきています。ある日、あめのうずめを呼んで、

「猿田彦の神を郷里の伊勢までお送りいたせ。それから、猿田彦の名をおまえが継いで、お仕えいたせ」

と命じられたのです。

初めての出会い以来すっかり猿田彦と仲良くなっていたあめのう

ずめは、喜んで伊勢まで猿田彦を送り、新婚旅行のような楽しい旅をされました。

そしてこれ以後、あめのうずめの子孫は、猿田彦の一字をもらい受け『猿女の君』と呼ばれて、宮廷で舞楽を奉仕する官女となったのでございます。

さて、猿田彦を無事に送り届けたあめのうずめは、笠沙の岬にもどってきました。その岬で、たい、ひらめ、うに、ほたて、たこ、いか、まぐろ、とびうお、すずき、ちょうちんあんこう、ナマコなどすべての種類の魚を呼び寄せました。

「お前たちは、ににぎの命の食べ物としてお仕えするか」

と言う問いに、魚たちは皆、

「お仕えします」

と答えたのですが、ナマコだけはだまったままで、何も言いません。怒ったあめのうずめは、

「この口はほんとうに何もしゃべらないのかい！」
と小刀を取り出して、ナマコの口を裂いてしまったのです。ひどいはなしですが、今でもナマコの口の裂けているのは、あめのうずめのせいだと言われております。

一方、伊勢の国に帰った猿田彦ですが、うわさによると、あざかという所で漁をしていて、とても大きい『ひらぶ貝』に手をはさまれたまま海に引きずり込まれてしまったらしいのです。
水中に溺れて沈んだ猿田彦の魂は、三つに別れて神霊となりました。
海の底に沈んだときに現れたのが、そこどくみたま（底度久御魂）。
海の中ほどで現れたのが、つぶたつみたま（都夫多都御魂）。
水面で現れたのが、あわさくみたま（阿和佐久御魂）ということでございます。

ところで猿田彦ですが、助かったのか、死んでしまったのかはまったくわからず、ことの真相は謎につつまれたままでございます。

猿田彦は伊勢の国（三重県鈴鹿市）の椿大社や伊勢市の猿田彦神社、二見浦の興玉神社にお祀りされています。

さて、うららかなある日、にニぎの命が笠沙の海岸を歩いておりますと、花のように美しい乙女に出会いました。

「あなたはどこの娘さんですか」

にっこりとにニぎの命が問いますと、娘は、

「おおやまつみ（大山津見）の神の娘、このはなさくや姫（木花之佐久夜姫）と申します」

としおらしく答えます。

「兄弟はありますか？」

「姉がおります。いわながひめ（石長姫）と申します」
「わたしはあなたとまぐはひ（結婚）たいと思うのだが」
「わたしには答えられません。父に聞いてみてください」
と突然の求婚にとても恥ずかしそうです。

後日、ににぎの命は大山津見の神に使者を遣わしました。これを聞いた大山津見の神はたいへんな喜びようです。すぐにたくさんの贈り物を持たせ、二人の姉妹を一緒にして、ににぎの命のもとへと嫁に送り出しました。

ににぎの命は大喜びで二人の姫を迎えました。しかし、姉の石長姫がとても醜い顔をしていたので、

「おまえは帰れ！」

と親元につき返し、美しいこのはなさくや姫だけを屋敷に留めて、一夜のまぐはひをされました。

一方、追い返されて家に戻った石長姫は、自分の部屋に閉じこもったまま二度とお姿を見せることはありませんでした。

父親の大山津見の神は、姉が送り返されてきたことをたいそう悲しみ、つらく思い、ににぎの命に呪いの言葉を送りました。

さてどうなっていくのでしょうか。このお話はまたこの次に。

石長比売

わたしはちょっとぶさいくな神です。このまえ、自分の顔を鏡に映しました。びっくりして鏡なんか投げすてました。

父の大山津見神社へあそびに行きました。

「雪が降り風が吹いても岩のごとく不変であるように」と言いました。わたしは延命長寿の守り神らしいです。うれしいです。

第二十八話
火中出産

ふることに伝う。

顔が醜いという理由で、姉の石長姫を送り返してきたににぎの命のもとへ、父親の大山津見の神は使者を遣わしました。

その手紙には、

――二人の娘を一緒にさしあげたのには深いわけがあったのです。石長姫を妻にすれば、あなた様のお生命が、雪が降り風が吹いても岩のごとく不変であるようにと。

このはなさくや姫を妻にすれば、あなたの御代が花が咲き誇るごとく栄えるようにと。

そう神にうけひ（誓約）していたのです。しかし、姉の石長姫を侮辱して追い返し、妹だけを愛とられたので、あなたのお生命は花のようにすぐに散ってしまうことでしょう――

このときから人の寿命が短くなってしまったと言うことでございます。

それからしばらくの月日が流れ、このはなさくや姫は、ににぎの命の前に出て、

「わたしはあなたの子供を身ごもりました。ちょうど産み月なのですが、尊い方の御子をこっそり生むわけにはいかないので、認知をして下さい」

とうれしそうに話されました。ところがににぎの命は、

「たった一夜で妊娠したというのか？　その子はわたしの子では

あるまい。きっと国つ神の子に違いない」
と姫を疑ったのです。
このはなさくや姫は、まさかこのような言葉が返ってくるとは思っていませんでした。身に覚えのない疑いを晴らすために、窓のない大きな産屋を作らせて中に入り、出口を土で塗り塞いでしまわれました。
「このおなかの中の子が、もしあなた以外の子どもであったなら、産むときに無事ではいられないことでしょう。もしあなたの子どもであったなら、無事に産まれてくることでしょう」
と神に誓われて、産屋に火を放ち、その火中で子どもを産んだのです。
火が燃え始めたときに生まれた子どもが、
ほでり（火照の命）。
火が燃えさかっているときに生まれた子どもが、
ほすせり（火須勢理の命）。

火が弱まってきたときに生まれた子どもが、ほおり（火遠理の命）。

こうして三人の男の子を無事に産み終えて、ににぎの命の御子であることを立派に証明されたのです。

火の中で産むとは、なんともすさまじいお産でございます。このことから、このはなさくや姫は、安産の守り神として信仰されるようになりました。そして、火を噴く神聖な美しい山『富士山』の神霊としてしずかに眠っておられます。

姉の石長姫は、父の大山津見のいる瀬戸内海・大三島の大山祇神社の摂社・阿奈波神社に延命長寿の守り神として、ひっそりと暮らしておられます。

一説によると石長姫は、鏡に自分の姿を写し見て恥じ入り、その鏡を山中に投げ捨てたということでございます。その鏡と石長姫は宮崎県西都市の銀鏡神社に祀られております。

また、ににぎの命は鹿児島県の霧島神宮や、川内市（鹿児島県）の新田神社にもお祀りされており、裏山にある可愛（えな）山稜にはお墓があるとのことでございます。

それから何年かして、長男のほでりは海幸彦という名で、魚を獲って海の民として暮らしておりました。末っ子のほおりは山幸彦という名で、山や野にでて狩りをし、山の民として生活しておりました。

ある日、弟の山幸彦が、兄の海幸彦に、

「たまには道具を取り替えて獲物を捕りましょう」

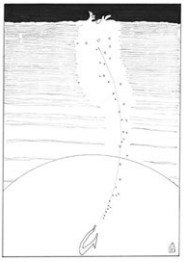
と提案をしたのです。しかし、海幸彦は、弟が何度たのんでも首を振るばかりでした。

このお話はまたこの次に。

大山津見神

こんにちは ぼくは大山津見です。
瀬戸内海の大三島という処に住んでます。日本のすべての山の総大将ですだからとってもえらいんです。
十二月十二日になると
山の木の数をぼくは
かぞえるのでこの日は山にはいらないでください。もし入ったら
木になってしまいます。
あと 道に迷ったりする人がいるけど、あれは
山に住んでる大戸或神という
迷いの神のせいです。ぼくではないです。

第二十九話
海幸彦と山幸彦



ふることに伝う。

弟の山幸彦は、

「兄さんお願い、道具を取り替えましょう」

と一度、二度、三度……としつこく言ってきます。そのたびに兄の海幸彦は首を振るのですが、山幸彦はどうしてもあきらめません。とうとう海幸彦は根負けし、ついに交換することを承知しました。

やっとのことで釣り道具を貸してもらった山幸彦は、大喜びで海

へとかけだしました。海幸彦はしかたなく狩りへと出かけましたが氣ものらないので、獲物も獲れません。山幸彦はというと、一日中釣り糸をたれていたのですが、さっぱり釣れません。そのうえ、大切な釣り針を失くしてしまったのでございます。

日暮れに帰ってきた山幸彦に、海幸彦は、

「道具の交換はもうやめにしよう。ほら」

と言って不機嫌に弓矢を返しました。山幸彦はうなだれて、

「……兄さんごめんなさい。釣り針を失くしてしまいました」

と肩を落として力なく答えました。海幸彦はそれを聞くと、たいそう怒り、どうしても返してくれと山幸彦を強く責めました。

困った山幸彦は、自分の大事な刀を細かく砕いて五百本の釣り針を作り、海幸彦に渡したのですが許してくれません。そこで今度は一千本の釣り針を作って持っていったのですが、

「刀で作った釣り針など欲しくはない！　骨で作ったあの霊力の

ある釣り針でないと絶対にだめだ」
と言う返事が返ってくるばかりでございます。

海に失くした釣り針をどうやって探せようか……。と途方に暮れて海岸で泣いていると、海流や風向きや天氣など、海のことならどんなことでも知っている塩つちの翁が白くて長いひげをゆさゆさ揺らしながらやってきました。

「ほっ。日の神の子孫、山幸彦ではないか。なにを泣き悲しんでいるのか？　ほっほっ」

と聞くので、今までのことをすっかり話すと、

「それはお困りのこと。善きことをお教えしましょう。ほっほっほっ」

と笑いながら砂浜にあぐらをかいて座り込みました。そして、翁が、

「ほっ」

と言うと、にょきと一本の竹が砂浜にはえてきました。
「ほっ。ほっ」
と二度言うと、二本の竹がはえてきました。
「ほっ」にょき。
「ほっほっ」にょきにょき。
「ほっほっほっ」にょきにょきにょき。
翁が「ほっ」と言うたびに竹がはえてきます。
いつの間にか砂浜にはりっぱな竹やぶができておりました。つぎに翁は、
「これぐらいでよかろう」
と言ったかと思うと、目にも止まらない素早さで竹を切り始めました。
「よっこらしょ」
と翁が砂のうえに座ったときには、細くきれいに切りそろえられた竹が翁の前に積んでありました。翁はその竹を一本づつ手に取り

素早く編み始めました。すると籠のような小舟がたちまちのうちにできておりました。

その舟は『間無勝間の小舟』といって、細い竹をすき間なく固く編んだ舟で、絶対に水が入ることはありません。

そして山幸彦をその竹舟にひょいと乗せ、

「わたしがこの舟を押し流しますと、海の道に沿ってかなたまで運ばれますのでしばらくそのままでおいでなさい。やがて海藻の森の中に銀色に照り輝く不思議な宮殿が姿を現します。海神、わたつみ（綿津見）の神の住む龍宮です。

その門に着いたならば、美しい水の湧き出る泉のそばに、良い香りのするかつらの木があるので、登って待っていなさい。きっと海神の娘が、あなたを見つけて相談にのってくれるでしょう。ほっほっほっほっ」

と言い、舟を押し出されました。

舟は潮に乗りどんどん流されていきます。やがて、塩つちの翁がいったとおりの不思議な宮殿が現れ、吸い寄せられるように門に流れ着きました。どこからともなくかぐわしい香りが漂ってきます。山幸彦は小舟を降りて泉のそばの桂の木に登り、枝に座って待っておりました。

すると、海神の娘、とよたま姫（豊玉姫）の侍女がきれいな器を持って水を汲みに現れたのでございます。

いったいどうなっていくのでしょうか。このお話はまたこの次に。

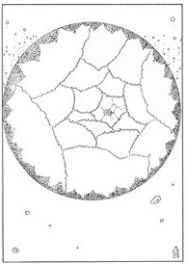
火遠理命（ホヲリノミコト）

ぼくはホオリの命（ミコト）と
言います。みんなは
ぼくのことを山幸彦（ヤマサチヒコ）と
呼びます。
兄の海幸彦（ウミサチヒコ）の大事（ダイジ）に
していたつり針（バリ）を
失くしてしまったので
海の国（ウミノクニ）に父（チチ）て来（キ）たよ。

第三十話
龍宮城

ふることに伝う。

木の上に山幸彦がいるとは知らずに、侍女は泉の水をくみ始めました。そのとき、なにやら光り輝く人影が水面にゆらいでいるので、不思議に思って桂の木を見上げました。



「水を頂けるでしょうか」

木の上から凛とした声が降ってきます。

侍女は驚いたのですが、枝に座っている若者がとても美男子だったので、いわれるままに器に水を入れて差し出しました。

山幸彦はその水を飲まずに、首にかけていた白い玉（真珠）をはずして口に含み、器の中にぷっと吐き出しました。すると玉は器の底にぴたりとくっついたのです。

侍女がいくら玉をとり出そうとしても、どうしても取れません。どうしようかと少し迷ったすえ、しかたなくそのまま、とよたま姫のところに運んでいったのでございます。

「門の外に誰かいるのですか？」

とよたま姫は器の中の美しく光り輝く白い玉を見て、「高貴な方しか持つことができない玉がどうしてここに？」と不思議に思いたずねました。侍女は、

「泉のそばの桂の木の枝に、とっても凛凛しい若者が……」

と水を差し上げたことなど、これまでのいきさつを話したので

す。

とよたま姫は、赤い糸に引かれるように、すぐに外に出て若者に会いました。二人はじっと見つめ合い、一目で恋に落ちたのでございます。

とよたま姫は父のわたつみの神に、

「御門にしごく麗しい方がおられます」

と告げました。

わたつみの神が出て会われますと、

「この御方は日の神の子孫、火遠理の命、山幸彦どのである」

と答えて、さっそく宮殿の中へ招き入れました。

その歓待はたいそうなもので、アシカの毛皮を幾重にも敷き、さらに絹の敷物を何重にも敷いて、その上に山幸彦を座らせました。

金、銀、珊瑚、真珠で飾られた品物、たくさんのごちそうをずらりと並べ、婚礼の宴が催されました。そして山幸彦をとよたま姫の夫として、大切に迎えたのでございます。

龍宮城では、タイやヒラメが舞い踊り、毎日のように珍しい宴会が開かれました。とよたま姫は夫のためにおいしい手料理を作りました。二人はまわりもうらやむほどの仲のよさです。

山幸彦は夢心地でした。なぜ自分がここに来たのかもすっかり忘れてしまったのです。

いつしか夢幻のうちに三年の月日が流れ、ある日ふと、山幸彦は釣り針のことを思い出し、大きなため息をひとつつきました。すると、今までと打って変わって、笑顔がみるみる消えていきました。口数も少なく、元氣もありません。

とよたま姫は原因がわからず心配でなりません。それで父のわたつみの神に、夫の様子を伝えました。

わたつみの神もいたく心配されて、

「娘がわたしのところへたったいま来まして、

『三年の間ずっと楽しく遊び暮しておられたのに、今夜大きなため息をひとつつかれた』

と申してきました。何か事情がおありになるのでしょうか。またここに来られたのには何か深いわけがあるのではないのですか」

とたずねました。

山幸彦はしょんぼりとして、ここに来たことの一部始終を語りつくし、兄に、失った釣り針をどうしても返せと責められていることを話しました。

じっと聞いていたわたつみの神は、すぐにたくさんの魚たちを呼び集めて、

「お前たちの中に、釣り針のことを知っている者はいないか」

と問われました。すると、もろもろの魚たちは、

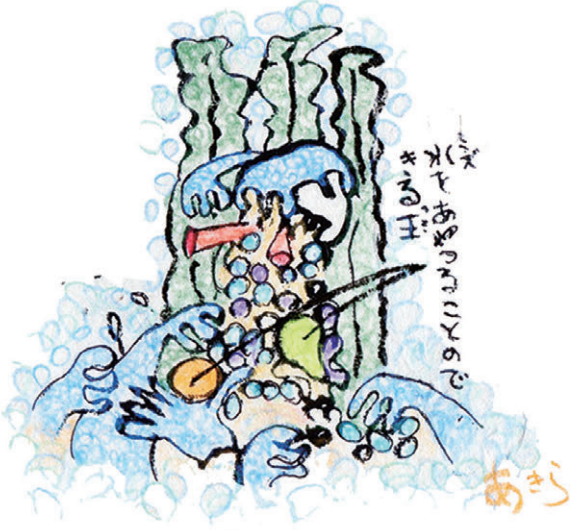
「鯛が、以前からのどにとげが刺さって、ものが食べられないと嘆いております」

と口をそろえていいました。

さていったいどうなるのでしょうか。このお話はまたこの次に。

大綿津見神

ぼくは海の神です。
伊耶那岐と伊耶那美がぼくを産んで
くれました。だいたい竜宮の国
の近くにいます。
海の魚はぜんぶぼ
くの仲達です。鮫
も友達ですが一度かまれ
ました。そこと泣きました。
竜宮に遊びに来たときはぜひ
声をかけて下さいね。
おみやげをあげるよ。



第三十一話
塩みつ珠、塩ふる珠

ふることに伝う。

魚たちの話では、鯛が釣り針を飲み込んでいるのではないかということです。そこで、わたつみの神が鯛を呼び、のどを調べてみますと、やはり釣り針が引っかかっていたのでございます。

そして、釣り針を取り出して洗い清め、山幸彦に戻し、

「この釣り針を、兄の海幸彦に返すときに、

この釣り針は、

『おぼ釣（ぼんやりとなる釣り針）

すす釣（心がすさんでくる釣り針）
まぢ釣（貧しくなる釣り針）
うる釣（愚かになる釣り針』
と呪文をとなえて、後ろ向きに手渡しなさい。そうすると魚は一匹も釣れなくなります。
それから、海幸彦が高い土地に田んぼを作ったなら、あなたは低い土地に作りなさい。低いところを選んだなら、あなたは高いところを選びなさい。
わたしは水を自由に操ることができるので、海幸彦のところには水を送らないようにしましょう。そうすれば、海幸彦は三年のあいだずっと貧しい暮らしが続くでしょう。
すると海幸彦があなたを恨んで、必ず戦争をしかけてきます。そのときにこの二つの珠を使いなさい。
一つは『塩みつ珠』といって洪水を起こすことができますので、溺れさせてしまいなさい。

もし助けを乞うなら、もう一つの『塩ふる珠』を使えば水を引くことができます。
このようにして、水を自由に操り悩ませるならば、海幸彦はきっとあなたに服従することでしょう」
と言って二つの珠をおみやげに渡しました。

そして、わたつみの神は、海に住むわに鮫を全員呼び集め、
「日の神の御子、山幸彦どのが陸地へ帰られることになった。陸までお送りせねばならない。お前たちのうちで、陸まで何日で行って帰ってこられるのか申し出なさい」
わに鮫たちは、それぞれが体の長さに応じて日数を計算して答える中に、スピード自慢の一尋わに鮫が進み出て、
「ぼくなら一日で行って帰ってこれるよ」
と答えました。
人が両手を広げた大きさを一尋と言うのでございます。

それを聞いたわたつみの神は、
「ではおまえに任せよう。海を渡っていくときに、恐ろしい目にあわすのでないぞ」
と言いつけて、山幸彦を背に乗せ、陸まで送らせたのでございます。無事海岸に着いた山幸彦は、お礼にと自分の懐剣をわに鮫に渡しました。サメの歯が鋭くなったのは、このときからだということでございます。

さて、山幸彦は、わたつみの神に教えてもらったとおりの呪文をとなえて、後ろ手に海幸彦に釣り針を返しました。すると、兄は、魚をまったく釣ることができなくなり、田んぼも不作続きとなり、どんどん貧乏になっていったのです。

海幸彦はこれはぜんぶ山幸彦のせいだと恨んで、攻めてきました。しかし山幸彦は『塩みつ珠』を使って洪水をおこし溺れさせます。「助けてくれ！」と悲鳴を聞けば『塩ふる珠』を使って水を

引かせます。助けるとこりずに襲ってき、襲ってくるとまた水を操って翻弄させ、何度もなんども繰り返し、海幸彦を痛めつけたのです。

海幸彦は、ついに降参して、

「山幸彦よ。これよりのちは、守護人となっておまえに仕えよう」

と約束されたのでございます。

この勝利で、山幸彦がにぎの命の後継者と決まり、海幸彦の子孫である隼人は宮廷警護人として仕え、今でも、新天皇が即位される大嘗祭のときには、このときのことをのちの世に残すために『塩みつ珠』『塩ふる珠』で翻弄され、溺れるさまを、身ぶり手ぶりを交えておもしろおかしく演じるのでございます。

ところで、妻のとよたま姫は、ある日、龍宮を出られて、夫である山幸彦のところにやって来ました。

「貴方の子供が産まれますう！」

いったいどうなるのでしょう。このお話はまたこの次に。

佐比持神

小刀のことを佐比って言うよ。山幸彦に小刀をもらったのでぼくの歯は鋭くなったんだ。ワニ鮫って呼ばれることもあるよ。

第三十二話　豊玉姫とわに鮫

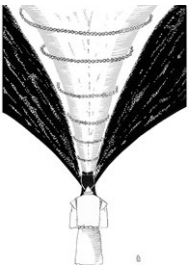
ふることに伝う。

龍宮からはるばると、夫の国までやって来たとよたま姫は、

「わたしはあなたの子どもを身ごもり、いま臨月を迎えました。天つ神の御子は海で産むわけにはいきませんので、こうしてやって来たのです」

と訪ねて来たわけを告げました。

そして、波打ち際にせっせと産屋を建て始めたのです。鵜の羽で屋根を葺き、あと少しで完成というときにとよたま姫は急に産氣づ



き、葺きかけの屋根をそのままにしてあわてて侍女といっしょに産屋に入られました。

しばらくして、産屋の中から、とよたま姫の声が聞こえてきました。

「龍宮では、子どもを産むときにはもとの姿に戻って子どもを産みます。だからけっして見ないでください」

山幸彦は不思議に思ったのですが、妻に言われたとおり外で自分の子どもが生まれるのを、そわそわしながら待っておりました。

初めてのお産なのでかなり時間がかかりそうな様子で、産屋の中からは陣痛に苦しむとよたま姫のうめき声と、姫を励ます侍女の声が聞こえてきました。

「姫さま、しっかりなされませ。水中出産されれば、もっと楽にお産ができますものを。わたしが心配したとおり難産になってしまいました。代われるものなら、代わって差し上げたいのですがこれば

かりは……」

「いいえ、大丈夫です。山幸彦さまの御子を水中で産むわけには参りません。どんなに苦しくてもわたしは、陸上でりっぱに子どもを産んで見せます。うっ、ううっ……」

山幸彦は氣がきではありません。それに、もとの姿にもどって産むと言った姫の言葉も頭から離れません。山幸彦は心配のあまりこっそりと中の様子をうかがいました。

ところがそこにとよたま姫の姿はありません。そればかりか、八尋（約十四、四m）もある大きな大きなわに鮫が、くねくねと動めいて、苦しそうにお産をしていたのでございます。見覚えのあるやさしい目からは、大粒の涙が流れていました。

山幸彦は仰天し、あわてふためいて逃げだしました。

夫にほんとうの姿を見られたことを知ったとよたま姫は、いたくお嘆きになられ、

「わたしは海の道を通ってあなたの許へ通おうと思っていましたのに……。はづかしい……。」

と、玉のような男の子を砂浜に産み残し、龍宮への通い路を塞いで帰ってしまわれました。

海辺に残された子どもの名前は、産屋作りの一部始終を物語って、

波打ち際に建てる／鵜の茅葺きの／いまだ作り終えず、という意味の波限建鵜葺草葺不合の命と名づけられました。

宮崎県の日向灘を望む鵜戸神宮の岩窟の中にある社殿の裏側では、乳房に似た岩から清らかな冷水がしたたり落ちております。きっと子を思うとよたま姫の母乳であろうと人々は言い伝えています。

一方、龍宮へ帰ったとよたま姫は、自分の姿を盗み見た夫をお怒りになってはいましたが、恋しい夫を忘れることができません。そ

れで、子どもの養育という理由で、妹のたまより姫（玉依姫）を夫のもとへ送りました。そのときに、歌を託されました。

赤玉は　緒さへ光れど
白玉の　君が装し
貴くありけり

赤い玉は糸も光ってきれいだけれど　わたしは貴方と初めて出会ったときに見た　貴方の分身である　あの白い玉（真珠）を忘れることができません

それを聞いた山幸彦は妻を恋しく思い、

沖つ鳥　鴨どく島に
わが率寝し　妹は忘れじ

世のことごとに

まぶたに残った玉の島　寄り添い暮らした夢の島　命の限り忘れません

と伝えたのでした。

山幸彦は高千穂に五百八十年間住み、お墓はその西側にあるということでございます。そして、山幸彦ととよたま姫は今も宮崎県の青島神社や鹿児島県の鹿児島神宮に仲良くお祀りされております。

人とわに鮫の子どもであるふきあえずの命は、育児に来た母の妹のたまより姫を妻にして『いつ稲の命』『稲ひの命』『御食ぬの命』『若御食ぬの命』の四人の男の子をお産みになられました。末っ子の『若御食ぬの命』が、のちの神武天皇で、またの名前をかむやまといわれひこ（神倭伊波礼彦）とも言います。

それから月日もたったある日のこと、三男の『御食ぬの命』は海の上を飛ぶように渡り、遥か彼方にあると噂されている常世の国へ探険に行きました。次男の『稲ひの命』は母方のふるさとである龍宮へと旅だって行きました。

後に残った長男の『いつ稲の命』と末っ子の『若御食ぬの命』の二人は平安な土地を求めて東に向かって旅立ち、途中、カメの背に乗って釣りをしている老人に出会うという不思議な大冒険が始まるのですが、この後のお話はまたの機会に譲りましょう。

これでひとまず神代の巻はおしまいです。

大昔の神々のお話はいかがでしたか？

今のあなたたちの生活と、神々の生きていた時代の暮らしぶりが、あまりにもかけ離れておりますので『古事記』のお話が、どれだけ

うまく伝えられたか、阿礼は心配しております。でも、神代のご先祖が居られたからこそ、あなたたちが産まれたのでございます。

ご先祖は、地球がおのずからころがり自転していることや、銀河系宇宙の外に更に大きな別の天（宇宙）が存在していることも太古から知っておられたのです。

日本には、こんなにすばらしい神話があるのです。世界にもたくさんの神話が残っています。自分たちの**神話を忘れた民族は滅びます**。だから決して忘れないでくださいね。

いまも夜空を御覧ください。天の川のほとりでは、八百万の神々が集まって『高天原会議』を開き『おのころ嶋』の行く末を案じておられることでしょう。

阿礼は千三百年ぶりに『古事記』を楽しく語らせて頂きました。こんどは、あなたが子どもたちに語り伝えてあげてくださいね。

あ！

きみが代は
千代に八千代に
さざれ石の　巌と成りて
苔のむすまで

この歌は、いざなぎといざなみ「き（男）・み（女）」が、仲むつまじく『みとのまぐはひ』をして子どもを産み、いついつまでも「き（男）・み（女）」の子孫が繁栄して、平和が末永く続きますようにと石長姫さまが『子孫繁栄』の祈りを込めて唄った歌なのでございます。

新しい二十一世紀に生きる、いざなぎといざなみの皆さん。仲良く『まぐはひ』して良い子をたくさん生んでくださいね。

玉依比売（タマヨリヒメ）

わたしの姉（アネ）は豊玉比売（トヨタマヒメ）と
いいます。ひとめぼれした
山幸彦（ヤマサチヒコ）との間に子供ができた
のですが、サメだった
ことがばれてし
まって子供（コドモ）をお
いたまま竜宮（リュウグウ）
に戻（モド）ってきました。

それで、わたしが、姉(アネ)のような子供(コドモ)を育(ソダ)てました。
すくすく育(ソダ)て良(ヨ)い男(オトコ)になりました。だからわたしと結婚(ケッコン)しました。♡

小林晴明さん、宮﨑みどりさんとの出会い

（二〇一九年 令和元年　五月）

小林晴明さん、宮﨑みどりさんとは、僕が政府刊行物大阪サービスステーション在職中からのお付き合いだ。知り合ったのは、僕が官報公告係から、政府刊行物書店部門の責任者となり、さらには子会社である「かんぽうサービス」を任された、まさにそのときであった。僕はと言えば、子会社を任されるにあたって、国が出した本を書店に卸すだけではおもしろくないと、この「かんぽうサービス」を拠点に出版事業に手を出した。それも「オーダーメイド出版」という、自費出版と企画出版がドッキングしたような出版形態で、企画時点から、その本の予約募集を行い、ある程度の部数が集まれば出版に踏み切ろうというスタイルだ。

この出版を初めた頃、「一万部以上を自費出版で売ったすごい人がいる」――そんな話題が耳に入ってきた。人文関係の本と言えば、三〇〇〇部売れたら上々の出来、そんな時代の話。それもまだまだ売れ続けているということで、ちなみに今回の二〇刷りで六万部というから驚きだ。そして、この本の著者が、小林晴明さんと宮﨑みどりさんであった。

当時、「大阪官報ビル」の管理も任されていた関係で、その空き室を利用し、月に一度、「アジア塾」という催しも運営させてもらっていた。この催しに、お二人を招き「自分の本は自分で売ろう！」というセミナーを開催してもらったのだ。

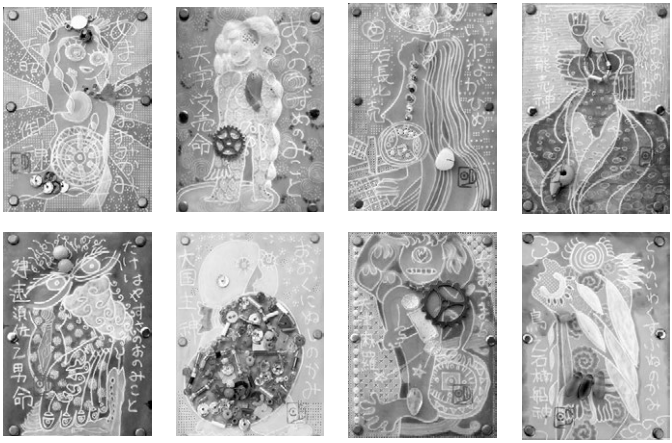
普通、自費出版で本を出そうという人は、本をつくることには熱心だが、本が出来た時点で完結してしまい、本を売ること、読んでもらうことには力を入れない。良い本は書店に並べさえすれば勝手に売れると錯覚しているのだ。この錯覚をお二人に打ち破っ

てもらおうというセミナーだったが、お二人に続く人は、僕の知る限り未だ現れていない。

それはさておき、小生、定年退職後、南河内の大宝というところへ引っ越すことになった。ところが、なんと、この地にお二人も既に引っ越しされていたのだ。

不思議な縁だと思った。この縁がもとで、小林晴明さんの「古事記の神さま」を、ネパールの手漉きみつまた紙で作成するに至った。お札の原料みつまたがネパールで自生しているというので、かんぽうサービスの時代、この仕事にも関わらせていただいていた。これら縁が絡みあっての仕事であり、その縁が、今回の「古事記のものがたり」二〇刷りのお手伝いへとつながったという次第だ。「紙」と「神」がつながった、なんとも不思議なご縁だと思っている。

（編集工房ＤＥＰ　桐生敏明）



神霊札 かみふだ kamifuda

小林晴明の多彩な想像世界、八百万の神々のカード

作者あとがき

（一九九九年四月二十七日）

子供のころから「神話や謎にみちた未知の世界へのあこがれ」が強く、アニミズムや古神道に興味をもち、故 小林美元氏に師事して古い神社や山上の岩くらなどをたずねて、二人で探険して歩いていました。

そんな私たちに、『日本の神話・古事記の世界』をインターネット上で連載する仕事が舞い込んできました。

若い人、特にゲーム世代・インターネット世代に向けて、わかりやすい古事記を書くというのは、とても難しいことに思えたのですが、一話、二話と話を書き進むにつれて「神話を忘れた民族は滅びます。どうか『古事記』を人々に伝えていって下さい」という稗田の阿礼のささやきが私たちに聞こえ出したのです。

書き進むにつれて、若い人だけではなく団塊の世代といわれるかなりの年齢の人たちまでもが「日本の神話」を知らないということにも氣づきました。

パソコンを持っていない友人、知人たちにコピーを渡し読んでもらうと、「おもしろくて読みやすい。ぜひ『古事記のものがたり』を本にして欲しい」と、出版出来ることを楽しみに応援してくれるようにもなりました。

私たちはいつしか、この仕事は天が与えて下さったに違いないという確信に近い思いが芽生えてきました。

しかし残念ながら名もないライター二人が書いた本を世に出してくださる奇特な出版社はどこにも見つかりませんでした。

そんなわけで、私たちはついに意を決し、一冊、一冊、この本を自分たちの手で製本することにしたのです。

何もかも機械化、量産化される世の中で、作者みずからが注文を受けて一冊ずつ手作りするなんて、少しばかげた話かもしれませんがいまはこのアイデアが二人ともかなり氣にいっています。

そう思って四冊の本を家で手作りしたのですが、これがなかなか大変な作業である上にコストがばかにならないということに氣がつきました。

とりあえずできあがった四冊をもって皆様に見て頂いているうちに、神様のお導きとしか考えられないありがたいご神縁をいただいたのです。

さまざまな紆余曲折がありましたが、結局私たちは二人で小さな出版社をつくり、まず三千部を出版することを決心致しました。

全国のご縁の頂ける神社にお伺いして『古事記のものがたり』を社務所に置いて頂こうと思っております。

私たちに大きな勇氣と希望を与えて下さった、伊勢神宮崇敬会の事務局長、奥重視様（現伊太祁曽神社宮司）と、高天原の天照大御神様、おおやびこの神様に心からの感謝を申し上げます。

最後になりましたが、とてもステキなイラストを描いて下さった荒木尚美さん、本当にありがとうございました。

（一九九九年中秋の名月の日に）

第七刷り改訂にあたって

（二〇〇四年十月の新月の日に）

一九九九年十月満月の日、たくさんの方々の応援を頂いて『古事記のものがたり』を出版してから五年が経ちました。この本が世に出て以来、紙面では語りつくせないほどの不思議な出会いや出来事がありました。

私たち自身も驚いているのですが、日本中の何人もの読者の方々が、この本をお友達に紹介して広めてくださっています。中には私たちのホームページを見た海外在住の日本人の方が「こんな判りやすい面白い古事記を探していました！」というメールを頂いたりもしています。

また、多くの神職の方々が「日本の神さまのことを知ってもらうには、この位かみ砕いてまず若い人に読んでもらうことが一番です」と応援して下さったり、古事記研究の第一人者「本居宣長記念館」の館長さんや研究員の方からは「良い本を書いて下さってありがとう」というお言葉を頂き、うれしく思っています。

第七刷を増版するにあたって、五年のあいだに学んだことを加筆して改訂させて頂く事になりました。これまでお世話になった多くの皆さまに、この紙上をお借りして心からの感謝を捧げたいと思います。本当にありがとうございました。これからも真心をもって、日本中に『古事記』を広めていきたいと思っています。それが私たちの使命だと感じています。

現在私たちは、各地で講演会・「古事記を楽しむ会」という勉強会・クルーズ船での講演・FMラジオなどにも出演させていただけるまでに成長することができました。至らない私たちですが、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

二十刷り改訂にあたって　宮崎みどり　（二〇一九年 令和元年五月）

一九九九年四月二十七日（孫娘の誕生日）無我夢中で『古事記のものがたり』の本を一冊ずつ手作りした日からもう二十年もの歳月が過ぎました。

いまだに一般書店に本を並べておりませんが二十刷目（六万冊）を改定増版させて頂けることになりました。

ネット社会の普及に伴い、本離れ・出版不況の中でこの六万冊という数字はある意味で自費出版の奇跡だと評価して下さる方もいます。

この度、出版当初から陰になり日向になって応援して下さっている桐生敏明氏のアイデアのおかげで、主人の晴明が描いた神さまのイラスト画を三十三枚挿入し、記念すべき二十刷増版号を改訂増版する事になりました。

二十年前を振り返ってみれば、『古事記』というフレーズさえも判ってもらえなくて、「ホームレスの研究をされているのですか？」

と真顔で尋ねられたことが今では笑い話になりました。

古事記のものがたりを気に入ってくださって口コミやボランティアで広めてくださった多くの方々のご厚意と、ご理解くださって社頭で本を領布してくださっている多くの神社さまや個人商店さまのご協力に心よりの感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

神話を忘れた民族は滅びます。

お願いです古事記を伝えていってくださいね。（阿礼）

改訂にあたって　小林晴明

（二〇一九年 令和元年五月）

二十年あっという間だったなぁ。いやになってくる。もう還暦だ。せっかく覚えてきたことも忘れそうだし、漢字なんかもあれっ？　とおもったまま書けない……。

すると、『古事記を楽しむ会』の生徒さんが、「横棒ひいて…、点々をその下に書いて…」などとやいやいと教えて頂けるまでになった。とほほ。

『古事記のものがたり』を書いて、日本のことを学んでよかったなぁ、うれしかったなぁと思ったことは、豪華客船、「にっぽん丸」と「パシフィックビーナス」に講師として乗船できたこと。イザナギとイザナミの産んだ日本列島を何周も周ることが出来た。無料だし、船内を楽しんで、お金も頂いて、おいしい料理も食べてと言うことなし。そのうえ、講演はみどりさんがほとんどしゃべってくれるしね。船上のデッキランチも最高でした。それもこれも今は天国に召されたクルーズプロデューサーのホーリー（堀川さん）のおかげでした。この場を借りて「ありがとう。ホーリー」

それともう一つは、八百万の神さまの姿をイラスト化出来たことかな。神さまの姿を、人間と妖精のような抽象的に彩ったユニークなイラスト。独創的なぼくの世界。二〇一七年五月と一〇月。二〇一九年四月。二〇一九年十一月と個展も開催できた。本当にうれしい。

古事記には、人は皆、使命を持って生まれてきている。良い言葉を使えば幸せになる。

自然そのものに神が宿っている。生活習慣の中に神話が息づいている、という素晴らしいことが書かれているのでぜひこの本を読んでください。

最後になりましたが、『古事記を楽しむ会』に来て、僕たち二人を支えて下さっている八百万のみなさん本当に本当にありがとうございます。

参考文献

新潮日本古典集成『古事記』１９７９

『古事記』日本国民文学全集１　河出書房新社　１９５９

橋本治著　『古事記』　講談社　１９９３

楠山正雄著　日本の神話と十大昔話　講談社学術文庫　１９８３

大歳礼恵・藤田直子著　日本のくに物語　文化サークルみすまる会　１９８３

くもんのまんが古典文学館『古事記』くもん出版　１９９０

出雲井　晶著　新・わかりやすい日本の神話　光琳社出版　１９９６

田辺聖子著　『古事記』　集英社文庫　１９９６

石川純著　新訳古事記　ちくま文庫　１９９１

図説日本の古典『古事記』集英社　１９７８

日本の古典『古事記』世界文化社　１９７４

戸部民夫著　八百万の神々　日本の神霊たちのプロフィール　新紀元社　１９９７

辻村三著　『古事記』神代の巻解読書２　名古屋『古事記』研究会　１９８２

『縄文古神道、古事記』研究家。
「古事記と古神道を楽しむ会」を主催。
大阪・阿倍王子神社 / 美具久留御魂神社 / などで開催中。
「縄文古神道講座」を高津宮にて開催中。
2024年より「ニギハヤヒ研究会(先代旧事本紀)」スタート。
豪華客船「にっぽん丸 / パシフィックビーナス」
日本一周クルーズ船内や日本各地で講演。
1999年、サン・グリーン出版を設立し、
共著「古事記のものがたり」を出版。
現在22刷6万6000冊。自費出版のレジェンドと云われている。

小林晴明（明）
兵庫県丹波篠山市生まれ。大阪文学学校にて小説、詩を学ぶ。環境雑誌「グローバルマインド」の編集部を経て独立。「いい話の新聞社」記者、携帯電話コンテンツに「晴明様の恋のおみくじ」「神社仏閣案内サイト」を制作。共著『古事記のものがたり』は、おとぎ話やファンタジーなどの得意ジャンルを生かし、難解な古事記をより豊かな物語性に富んだストーリーに仕上げることに成功。『古事記』に登場する不思議な神さまたちを描いた、パーチメントクラフト作家として活躍中。2013年「美術年鑑」掲載。

宮﨑みどり（小林）
岡山県和氣郡生まれ。関西外国語短期大学卒業。大阪文学学校にて小説、詩を学ぶ。「いい話の新聞社」編集部を経てフリーランスのライターとなる。経済産業省（日本の伝統工芸）ウエブ版、大阪市福祉協議会発行誌「コンボ」、旅行雑誌「マップルマガジン」、その他インターネット環境サイトにも執筆。百人一首、万葉集、日本の古典文学や古神道などの知識を深める中で、故 小林美元師と出合い『古事記』との不思議なご神縁が結ばれることに…。

古事記のものがたり
稗田の阿礼が語る　ゆかいな日本の神話
（無断転載・複写を禁ず）

1999年10月24日（満月）第 1 刷発行
2024年令和6年4月吉日　第22刷発行
（総ルビ入り）

著者　小林晴明・宮﨑みどり
本文イラスト　荒木尚美・小林あきら
装丁　仁井谷伴子
発行所　サン・グリーン出版
発行者　小林　明
〒585-0005　大阪府南河内郡河南町大宝1丁目22－3
TEL　0721-90-3669
FAX　0721-74-5525
Eメール　izanami@mvb.biglobe.ne.jp
ホームページ　http://www5c.biglobe.ne.jp/~izanami/
組版　編集工房ＤＥＰ
印刷製本　株式会社モリモト印刷

この本は書店では販売しておりません。
ご注文をお待ちしています。
（1,600円・税別）

©SEIMEI KOBAYASHI・MIDORI MIYAZAKI 2024Printed in Japan

ISBN978-4-921153-00-7　C0093　¥1600E

9784921153007

ISBN978-4-921153-007
C0093 ￥1600E

1920093016001

●サン・グリーン出版●
定価・本体1600円＋税

午　未　申　酉　戌　亥　子　丑　寅　卯　辰　巳